

特集

田中瑛
辻浩平

栖来ひかり

柳澤田実

河野有理

本多弘之

マーサ・ナカムラ

北川真也

金承福

大胡高輝

繁田真爾

あんど

あんど

あんど

あんど

特集

〈よりどころ〉は
どこにあるのか

2025
45

人間とはなにかという問いさえ見失う危機に直面する現代。

いかに困難や苦悩と向き合い、

ともに学び、歩む場をひらいていくか。

そのような課題に真摯に向き合う人々への思いを込めて、

本誌は『aṅjali（アンジャリ）』——サンスクリット語で「合掌」——
と名づけられている。

〈よりどころ〉はどこにあるのか

SNSの急速な普及などにより、大量かつ多様な情報が溢れ、「ポスト真実」の時代とも言われます。何が「正しい」かを判断する規準が見えにくくなっている中、社会・国家・文化といった複数のレベルで分断が進み、衝突や紛争が起きています。今、暮らしや人生のさまざまな場面で、私たちが「真実」を見極める根拠とすべき〈よりどころ〉はどこにあるのでしょうか？

今号の特集で、この問いは多様な局面に及びます。従来型の「マスメディア」の影響力が低下しつつある状況下、他者にも響く「真実」を見いだし、共有するのに必要なものとは？ しばしば個人や集団のアイデンティティを規定し、あるいは動揺させてきた国家やその歴史が持つ抗い難い力……私たちはそれとどう向き合えばよいのでしょうか？ また、自分や世界の「現実」を見極めるために、宗教的なものも含め、さまざまな「物語」やファンタジーが求められています。そうした中、新たに提起されている親鸞の姿などを通して、私たちの信仰のあり方や生き方もまた、問い直されているのかもしれない。

ますます複雑化する世界と時代を生きている私たちは、どこに、どのように〈よりどころ〉を見い出すことができるのか——その在り処をみなさんと探っていきたいと思います。

（親鸞仏教センター 伊藤真）

特集

田中瑛 ……● 2

私たちは「本音」とどう向き合うか？——「ポスト真実」の課題と対話

辻浩平 ……● 6

ナラティブの衝突をどう乗り越えるのか——「境界」を行き来する

栖来ひかり ……● 10

チェン・チェンポー？ たん・てんぽー？——小惑星「陳澄波」をめぐる台湾の多声性^{ポリフォニー}

柳澤田実 ……● 12

現実を肯定するためのファンタジー——ディズニーとPIXAR

河野有理 ……● 16

親鸞はジャズ・ブルースである——藤田省三の「歎異抄ノート」をめぐる

本多弘之 ……● 20

「よりどころ」を求めるということ

マーサ・ナカムラ ……● 22

「おしゃれ」との出会い

北川真也 ……● 24

地図にならない「地」を踏みしめて——地下という垂直空間からの地上への問いかけ

金承福 ……● 28

本の街・神保町で韓国の本屋を開きました。

大胡高輝 ……● 30

ひめやかな愛惜について

繁田真爾 ……● 31

「土崩瓦解」する世界と、「完全なる立脚地」

連載

Essais

交差点

私たちは「本音」とどう向き合うか？

——「ポスト真実」の課題と対話

田中瑛
TANAKA Akira

「真実」が説得力を失う社会で

「ポスト真実」が新語として話題を集め、まもなく十年が経つ。事実に基づく議論よりも個人的な感情に寄り添う言説の方が意思決定に多大な影響を及ぼすようになった。SNSの普及により、誰もが情報を発信できるようになったことは「民主化」の動きを祝福するかのようなものだった。しかし、現在、私たちは制御不能なほど多くのつながりと共感に直面し、荒唐無稽な陰謀論や差別意識が飛び交い、「真実」が広く共有されることを確信できないような「暗い時代」を生きている。本稿では、コミュニケーションの送り手と受け手の関係の観点から、私たちは「真実」にどのような接近すれば良いのかを考えたい。

まず、国民という同心円的な枠組みを前提に、

不特定多数に情報を届け、社会的事実を生み出すマスメディアは、その影響力を行使する過程で専門職倫理を編み出すことで、自らの文化実践の正当性の確保に努めてきた。例えば、「意見の分かれる問題は多角的な視点から論じる」、「事実を歪曲して報道しない」、「公権力から自律した立場を貫く」といった努力目標を自ら掲げ、権力や商業主義から距離を置きながら、市民による民主主義的な意思決定に奉仕する。こうした意識を内面化してきた。民衆が自由闊達で開かれた場において議論を行い、さまざまな意見を競わせながら「真実」に接近していくことは、公共的な意思決定を駆動させる上で不可欠である。

ところが、ウェブ空間では、このような倫理よりもある種の「本音」の方が圧倒的な力を保持している現状がある。私たちが利用するソーシャル

メディアでは、より多くの「いいね！」を獲得し、広く拡散された投稿が影響力のある言説を生み出しており、そこでは、裏表のない自分自身を演じ、多数の共感を集めることが好まれる。動画共有サイトを眺めても、「タブーに斬り込む」や「本音トーク」といった言葉が密かな人気を集める状況がある。このことは、米国の放送業界で「フェアネス・ドクトリン」（公平性原則）が撤廃された後、「トールラジオ」と呼ばれる番組が量産されたことを彷彿とさせる。こうした番組では政治的な話題を個人的な語り口から取り上げ、通常のニュース番組では表に出されない「本音」を口にするパーソナリティが人気を集めていた。ウェブ空間でもこうした論理は幅を利かせるようになっていく。

このような現代のメディア環境において、近代民主主義の礎である自由、平等、多様性、人権な

どの価値は、報道機関が担ってきた権力監視のような機能も含め、複数の選択可能な見方のうちの一つ、いわば「リベラルなイデオロギー」として相対化され、シニカルな目線や不信の矛先が向けられるようになった。マスメディアのジャーナリズム実践が掲げる理念の裏に、何かしらの利己的な動機があるはずだと信じて疑わない人々は、「マスコミ不信」の旗印の下に異なる世界観を切り開こうとする。そうした状況は、似非科学や陰謀論、排外主義的な言説において広く見られ、対話が不可能なまでに認識の齟齬が生じていることが深刻な分断を招いている。

それでは、ジャーナリズムはこの状況にどのように向き合うべきなのか。情報の送り手が事実を伝え、受け手が正しい情報を見極めるというリテラシー感覚を身に付けさえすれば、「真実」に到

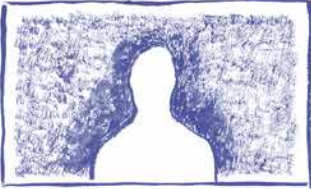
達できるという理屈は、どこか懐古的で空虚なものに映る。マスメディア全盛期には、私たちは専門家に信頼を寄せるしかなく、それゆえにマスメディアが提示する「真実」は正当性を認められていた。しかし、グローバルな規模で広がるプラットフォームの台頭や、ウェブ空間における（見せかけの）自由により、マスメディアが保持していた正当性は散逸する。「真実」を取り巻く相互の信頼関係を理解するために考える必要があるのは、情報の送り手と受け手の間の関係をどのように編み直すのかである。

何故人々の心を掴むのか？を考える

裏を返せば、今日のメディア環境では、情報が飽和し、その選択肢も際限なく増大していく。一

見すると選択肢の増大は自由を招くように思われるが、それが過剰であるならば、むしろ実質的な選択肢を狭めることになる。「何を信じれば良いのが分からない」というのは、いまやありふれた感覚であり、情報環境を自分自身の欲望や快楽に応じて最適化されたコンテンツで満たす以外には何もできないように感じられる。

そして、時間と場所に関係なく情報が流し込まれる常時接続社会は、立ち止まる時間を私たちに与えてくれない。より手軽で、分かりやすく、共感可能で、等身大に感じられるような情報を受容するだけで一日が過ぎる生活において、難解で、辛気臭く、一歩引いて考える必要がある問題を取り上げる実践は、注意を引き付けにくい。例えば、入念な長期取材の下で視聴者から遠く隔たった世界を描き出すドキュメンタリー番組よりも、自分



〈よりどころ〉はどこにあるのか



自身と親しく感じられる個人が即興的に作り出す利用者生成コンテンツ（UGC）の方が人々を魅了している。よほど意識しない限りは、自分自身が不快だと感じる情報に接したり、自分とは異なる他者の意見に耳を傾ける余裕などは失われてしまう。

以下のように考えることもできるだろう。情報が欠乏する時代には、「真実」は私たちの生活世界の〈外側〉に位置するものであり、マスメディアは遠くにある「真実」を映し出してくれるものだったが、情報が飽和する時代では、各々が「私」自身の身近な感覚の〈内側〉に「真実」を見出すようになったのではないかと。自分の知らない世界を画面越しに見て触発されるという態度よりも、自分が既によく知るものを見て、自分と誰かのつながりを確かめるような態度の方が現在では旺盛である。このことを踏まえると、「マスコミは嘘ばかりだ」と誰かがうそぶく時、それは事実を隠すということを批判するのではなく、「本音」や「本心」を隠すことを批判しているようにも思われる。私たちが日常的な会話の中で「本当のことを言ってほしい」と感じるのと同じように、マスメディアにも、そうした作り込まれていない、情緒的なものを求めているのかもしれない。実際、多くの記者や制作者は自らの職業倫理に徹し、名前や顔を出さず、自らの生み出すコンテンツに慎重な配慮をしなければならない。しかし、そうし

た無私の姿勢は「建前」的に見られることも少なくはない。紙面や画面に映る存在には親近感が湧いたとしても、紙面や画面に顔を出さず、「私」として語るものがない存在に對して、そうした感情を抱くことはないだろう。

それでは、何が受け手の心を掴むこととなるのか。例えば、インフルエンサーや芸能人や政治家は、自分自身を曝け出し、「私」の思いの丈を公に對して包み隠さず述べることを得意とする。誰でも投稿できるソーシャルメディアでは、公的なものと私的なもの、建前的なものと本音的なものが同一のタイムライン上に並び、同一の評価軸でまなざされる。そうした空間で名を馳せる人々は、マスメディアにおける舞台裏と表舞台、業界人と一般人、報道と娯楽といった境界線を掻き消しながら、自分自身をより身近な存在として表象する。このことは「マス」と言うほど大規模ではないにせよ、不特定多数のフォロワーを獲得し、民意の形成に影響を与えている。

誰もがメディアを通して「私」を曝け出すことを余儀なくされることで、報道業界の内部にいる個人にも自分自身をどのように表現するのかが問われるようになる。例えば、記者会見がオンラインで中継され、見世物化する状況は、「ニコニコ生放送」などの動画配信サービスを皮切りとしてよく見られるものとなった。しかし、これは不思議な現象である。なぜならば、本来、記者会見は

コンテンツを制作するための取材の一環であるにもかかわらず、その前の段階で衆人環視に曝されるためである。さらにはウェブ媒体ではそうした記者会見そのものが出来事として扱われ、記事になることもある。そして、記者会見というプロセスはリアリティ・ショーを視聴しているのと同じ感覚で視聴されるようになり、記者の質問が「高圧的で不愉快なもの」として受容されれば非難され、「感じの良いもの」として受容されれば称賛される。それは、事実かどうか、放たれるメッセージが妥当かどうかという水準ではなく、観る者にとつて自然で、親しみやすく感じられ、共感できるか否かというコードと照合して解釈されることとなる。

このような現象は、報道記者にとつて「何を伝えるか」が重要である以前に、「誰が伝えるのか」、「どのように伝えるのか」が重要であることを示唆している。もちろん、世の中の出来事を記録し、その出来事に潜む問題を伝える重要性に変わりはないし、それを放棄する実践をジャーナリズムと呼ぶことは難しい。しかし、メディア・コンテンツが制作される過程が否応なしに透明化する現在、その過程における記者の振る舞いがその人自身の内面と整合し、自然であるように見えることが要求されるのも確かである。オーディエンスは、対面での相互行為に加え、リアリティ番組（あるいはそれに類するコンテンツ）の視聴やソーシャル

ルメディアの利用において、他者の行為を観察し、評価することに慣れ切っており、そこに「わざとらしさ」や作為性を見出せば、メッセージは字義通りに受け止められることはない。報道の送り手が「私」として自分自身を演じる時にも、それは受け手との交渉において、共感可能で説得的なものであるかという観点から評価されていく。

このことは「感情労働」という概念とも重なる。感情労働は、自分自身の感情を入念に管理・制御しながら、期待された役割を「私」自身として演じる労働の形態だ。客室乗務員や芸能人がそうであるように、自己演技は「本物」めいたものとして消費者の心を掴むがゆえに、商品として価値を持ち、SNS時代には誰もがこうした感情労働を迫られるようになる。しかし、一人称で物事を表現し、「私」を開示するような実践には、プライバシーの侵害や誹謗中傷のようなリスクも付いて回る。これを「私」個人の問題に還元して良いものだろうか。

「私」の外に共感を向けるには？

情報の送り手が自分自身を曝け出し、見世物の消費者の「よりリアルに感じられるものを見たい」という欲望を受け入れることは、現状を受け入れた上での戦略である。これは応急措置としては実効性があるのかもしれない。しかし、「ポスト真実」

の根底にある問題の解決に結び付くかは定かではない。

ポピュリズムは「ポスト真実」の背後にある問題であり、「エリート」を名指しし、それを告発する「私たち」のイメージを描き出すことで、勢力を拡大している。社会的に弱い立場に置かれたマイノリティのみならず、より多くの人々が「自分自身の内に抱える葛藤や思いに寄り添われていない」と感じる状況にあって、この手法は絶大な支持を集めている。例えば、記者、教員、官僚といった職業に就く人々は、悪い意味で「エリート」と目される場面が少なくはない。私たちは「間違い」を極力避けるべく、精巧に作り込まれたメッセージ「正論」で自分自身を論理武装していると思われやすい。そのような相手に対し、「話を聞かされる」と警戒する場面はあっても、「自分の話を聞いてもらえる」という感覚を抱くことはないだろう。このことは、情報の送り手と受け手の間に壁を作り上げている。

それでは、自分とは異なるように見える他者に「自分自身と同じようなもの」を見出す連帯の可能性を、前述した「自己演技」に見出すことはできないだろうか。自己の重要性が増大する現代社会においては、誰もが「自分の話を聞いてほしい」と感じており、情報発信の担い手には、「聞き手」としての役割を演じることが求められる。それは、陰謀論や似非科学や排外主義のような「強い主張」

に耳を貸し、他者の尊厳を侵害する行為を許容するというのではない。むしろ、こうした相手が抱える悩みや葛藤のような「弱さ」に耳を傾け、自分自身の「弱さ」と重なる部分に共感を寄せるために、自分自身の弱く、脆く、情けない側面も表に出す必要があるということだ。例えば、送り手の側がメッセージの形成において裏に潜めがちな「分らないこと」、「戸惑うこと」を積極的に共有し、「私たちはこういうことの解決策が見出せず、翻弄され、悩んでいるのだ」という共通性を送り手と受け手の垣根を越えて見出す。そして、そうしたリアリティを生成すべく対話を繰り返すことが何より求められているように思われる。

すなわち、情報が溢れ返る時代であるからこそ、メッセージを一方向的に伝える／受け取ることよりも、相互に見て、聞いて、話す方が、「真実」に接近し、それを説得的で正当性のあるものとして示す上で有効なのではないだろうか。思えば、公共性や民主主義の基盤となるのが親密性であり、そうした「私」と誰かのつながりは「私」の〈内側〉に向けられた関心を、少しばかり〈外側〉に差し向けていく可能性を秘めている。そして、失われ、散逸している「真実」の正当性をどのように復権するのは、それ自体が対話を通して考えられなければならない。

(たなか あきら・実践女子大学人間社会学部専任講師)



〈よりどころ〉はどこにあるのか



ナラティブの衝突を どう乗り越えるのか

——「境界」を行き来する 辻浩平



TSUJI Kohai

世界はナラティブの戦いに満ちている。ナラ

ティブは「物語」や「言説」などと訳される。人々が物事を理解する上で事実関係だけでなく、そこに意味や解釈を付け加えて物語として捉えることだ。何が正しいのか。公平、中立とは何か。対立するどちらの立場に与（よ）ずるのか。人々がそれぞれの価値観で、こうしたことを判断する上で、強い影響力を及ぼすのがナラティブだ。どのナラティブを受け入れるかで物事の見方は一八〇度転換する。そしてナラティブが衝突する最たるものは戦争や紛争だ。

私たちは紛争の時代を生きている。戦争の世紀と言われた二十世紀を経た今も、紛争や軍事衝突は後を絶たない。ロシアによるウクライナ侵攻や

イスラエルとハマスの軍事衝突は今も続いている。

本稿では紛争とナラティブの関係性について考えてみたい。私は記者として、イスラエルとパレスチナ、アメリカ、そしてロシアに駐在した。いずれも上記の軍事衝突に深く関係している国と地域だ。対立する双方の人々の話に耳を傾けた経験は、今の私を形作っている。

対立する両者には、それぞれにナラティブがある。記者にとって客観性や中立性が重要なのは論をまたないが、双方の話に耳を傾ければ傾けるほど、「中立」の輪郭がぼやけてくる感覚を覚えた。この感覚を突き詰めていけば、深く分断され、対立する世界の「境界」を行き来できるようになるのではないかと私は考えている。

深刻な分断は対話を妨げる。双方の主張にフェアに耳を傾けることから対話は始まる。

双方のナラティブ

イスラエルとパレスチナ、ロシアとウクライナのナラティブは正面からぶつかっている。イスラエル側は、イスラム主義組織ハマスによる越境攻撃を受けて、もう二度と悲劇を起こさせないために、敵を殲滅（せんめつ）する徹底的な軍事作戦が必要だ、とのナラティブを展開する。一方のパレスチナ側から見れば、ハマスの越境攻撃は、故郷の土地を奪い、長年にわたる占領政策を続けるイスラエルに対する反発に端を発した行為と映る。

ウクライナ侵攻についても、ロシアは自国の完全保障のためにウクライナの「非武装化」や「中立化」を主張し、西側諸国が軍事侵攻と呼ぶものは「特別軍事作戦」にすぎないとのナラティブだ。一方のウクライナ側は、軍事侵攻はロシアによる一方的な侵略にほかならず、法の支配、民主主義、自由といった価値観のためにも世界がロシアに立ち向かうべきだとしている。

紛争の「起点」はいつか

双方のナラティブの構図を理解する上で、私に常に意識しているのが「紛争の『起点』はいつか」という点だ。イスラエル側の起点は二〇二三年十月七日だ。この日、ハマスの戦闘員などがガザ地区の境界を越えてイスラエル側に奇襲攻撃を仕掛けた。およそ一二〇〇人の市民などが殺害され、二五〇人を超える人が人質となった。言うまでもなくハマスの残虐行為は許されるべきではない。だからこそ、イスラエルは自衛のための軍事行動を行っているという立場だ。

一方、パレスチナ側の起点はより前にさかのぼる。それは一九四八年であり、一九六七年だ。一九四八年はイスラエルが建国され、イスラエルとなった土地に住んでいたパレスチナ人七十万人が故郷を追われ難民となった。一九六七年は第三次中東戦争が起きた年。それ以降、イスラエルは

パレスチナ人が暮らす東エルサレムやヨルダン川西岸、ガザの占領を続けている。

ここを起点にすれば、故郷の土地を奪われた上に占領下での暮らしを余儀なくされ、「天井のない監獄」と呼ばれる状況に置かれたガザやパレスチナ側の視点の重みが増してくる。

どちらの起点にもとづいて議論するかで、紛争の見方は異なってくる。イスラエル側の起点に立てば、市民を巻き込む残虐な奇襲攻撃を仕掛けられた被害者としてのナラティブが強調される。だからこそイスラエル人にとっては、パレスチナ人六万七千人以上（二〇二五年十月現在）が犠牲になっっているガザへの軍事作戦も正当化される。イスラエルはガザ地区への食料や燃料の搬入も制限し、栄養失調の子どもが急増する非人道的な状況を引き起こしている。だがそれすらも「ガザの市民がハマスを選んだのだ」（ハマスはパレスチナの二〇〇六年の選挙で勝利）、と正当化されるのだ。

私は二〇二四年十二月に取材でイスラエルを訪れたが、現地のメディアはハマスによる襲撃で命を落としたイスラエルの市民や人質の家族が今も抱える苦しみについて繰り返し伝えていた。この時点で襲撃から十四カ月が経過していたが、イスラエルが負った傷の深さがうかがえた。被害者としてのナラティブが報道によってより強化されているようだった。これは鶏と卵のような関係で、

被害者としてのナラティブが社会に浸透しているからこそ、こうした報道につながっているのかもしれない。

これは良い悪いの話ではない。多くのイスラエル人にとってこの紛争の起点は二〇二三年十月七日なのだ。

イスラエルを訪問中、十年程前に暮らした際に感じた、底抜けに明るく、楽観的な国民性は様変わりした印象を受けた。レストランでは、快活に話していた人々が、声をひそめるようになっていた。十月七日のトラウマは残り続け、ある取材先の人は「いつまでも、かさぶたがでぎずに癒えないでいる、傷のようだ」と表現した。

イスラエル人の中にはハマスの攻撃を「第二のホロコースト」と形容する人も少なくない。だがこのような表現を使うことは異例だ。彼らの多くは「ホロコーストのようだ」といった表現を嫌うからだ。六百万人もの命が奪われたホロコーストはユダヤ人にとって唯一無二の悲劇だ。「ホロコーストのようだ」という表現によって、他の惨事と同等のものにしてほしくないという考えがあるのだ。イスラエル人が受けたショックの大きさがうかがえる。

現地滞在中、パレスチナ側の苦しみはイスラエルのメディアで報じられているのはほぼ目にしなかった。イスラエル人と話しても、パレスチナ側にイスラエル建国やその後の占領政策への怒りが



〈よりどころ〉はどこにあるのか



積もり積もっていることへの理解の声はほとんど聞かれなかった。二〇二三年十月を起点にするイスラエルにとってみれば、それ以前の行動は考慮に入らないのだ。

「起点」の対立ウクライナでも

この構図はウクライナ侵攻でも同様だ。日本を含む多くの国にとって、この侵攻の起点は二〇二二年二月二十四日だ。あの日、ロシア軍の戦車が国境を越えて攻撃を仕掛けなければ、今の事態は起きなかった。

言うまでもないがこの軍事侵攻は、ロシアが一方的にウクライナの主権を踏みにじり、国際秩序を根本から揺るがした許されざる行為だ。

しかし、プーチン大統領やクレムリンを筆頭に、ロシア人の多くはそうは考えていない。彼らにとつての起点はソビエト崩壊後の一九九〇年代以降続いたNATOの東方拡大であり、二〇一四年のクリミア侵攻をきっかけに始まったアメリカによるウクライナへの軍事支援だ。ロシアが核心的利益とみなすウクライナに欧米諸国が政治的のみならず軍事的にも手をつき込んできた、と映っているのだ。

この考えを象徴するプーチン大統領の言葉がある——「ウクライナでの戦争と呼ばれるものは我々が始めたものではない。ロシアは戦争を終わ

らせようとしているだけだ」。つまり西側諸国がウクライナに手をつき込むことでエスカレートさせた事態に、ロシアは「特別軍事作戦」で終止符を打とうとしているだけだ、というナラティブだ。ロシアは被害者であり、加害者ではない、との独自の主張だ。

ここでも被害者のナラティブが力を持つ。軍事侵攻後、高校生向けの歴史教科書にはプーチン大統領のこの言葉が記載されるなど、クレムリンのナラティブは多くの国民に浸透している。

ウクライナ侵攻の起点を二〇二二年二月に置けば、悪いのはロシア。一九九〇年代に置けば、うは考えないロシア側の視点が少しは想像できるようにになる。

すべて事実に基づいている

ナラティブと「起点」の捉え方を見てきたが、ここで重要な点がある。それはどちらのナラティブも事実、ファクトに基づいているということだ。どちらかが嘘を言っていたり、間違っていたりするのではない。どのファクトに重みを置くのか、その構成の仕方によって、見方が一八〇度異なってくるということだ。

異なる起点は異なるナラティブを生み出す。異なる時点を起点とする人に、いくら「そうでない」と説いてもあまり意味はないし、その人の歴史観

を変えることはできない。私はロシアに駐在したおよそ一年半の間、それを実感を持って学んだ。

ロシアがウクライナ侵攻を開始したおよそ四年前、私はアメリカの首都ワシントンに駐在していた。そして当時のバイデン政権が矢継ぎ早に打ち出すロシアへの厳しい制裁やウクライナへの軍事支援を、私は連日、報じ続けた。侵攻開始から二年近く経って、今度はロシアに赴任し、情勢を正反対の側からウォッチすることになった。

アメリカではさんざん制裁発動の原稿を書いていたのに、ロシアに来てみるとスーパにはものがあふれ、レストランはにぎわい、通常の経済活動が行われていることに目を見張った。

生活面もさることながら、最も驚かされたのはその世界観だった。独立国家の主権を無視し、国際秩序を根本から揺るがすロシアによる軍事侵攻。しかし、ロシア人から見ると「祖国を防衛する、やむなき戦い」と姿を変えることを、多くのロシア人とのやりとりを通じて痛感させられた。ロシアのメディアは、ロシア軍が進軍し、ウクライナの町を侵略するたびに「解放した」と報じていた。まるであわせ鏡の世界だった。ウクライナ侵攻の「起点」が二〇二二年二月だと信じる世界から、一九九〇年代だと信じる世界にワープしたような感覚だった。ロシアの独立系世論調査機関「レバダセンター」の二〇二五年七月の調査でも軍事侵攻を支持する人の割合は七八%にのぼっている。

「境界」を行き来する

最後にナラティブや分断をいかに乗り越えるかについて考えてみたい。本稿の冒頭で、「中立」の概念がぼやけてくる感覚について言及した。双方のナラティブに耳を傾けるほど、紛争をめぐって、白か黒かに見えていた事象がグレーに見えてくることがある。

英語には「あなたをジャッジ(judge)しろ」というフレーズがある。相手の立場や考えを否定せず、ありのまま受け止める、という意味で使われる。分断される世界を行き来する際に、私はこの言葉を大切にしている。最終的にどちらのナラティブに重心を置くか(置かないかも含めて)は別にして、相手をジャッジせずに耳を傾けることから始めるようにしている。

双方のナラティブにフェアに耳を傾け、両者の言い分の「境界」に立つ。そして「境界」を行き来することが双方の理解を促進し、対話を進める手立てとして有効なのではないか。相手をジャッジし、断罪しているだけでは、対立の解消にはつながりにくい。

この教訓を私はロシアでの度重なる失敗から学ぶこととなった。当初、侵攻を支持するロシア人と議論する中で、私がロシアは国際法に違反し、ウクライナの主権を踏みにじっていると指摘して

も、互いの話とはかみ合わなかった。それは起点がずれていることを私が理解していなかったからだ。侵攻の起点が二〇二二年二月と考えない人々に、その違法性を問いただしても「そもそも西側が仕掛けてきた戦いじゃないか」と返されて終わってしまうのだ。

ロシアで取材したある女性の言葉が今も頭から離れない。五十代のこの女性には一九九〇年代にスウェーデンに移住した兄がいる。ソビエト崩壊の混乱期に欧米に移住した一人だ。彼女は兄と仲がよく、今でも数日おきに電話しているという。

彼女はロシアのウクライナ侵攻を支持していた。そこで、ウクライナ侵攻をめぐって、兄とどのような会話をするのか尋ねてみた。すると彼女はこう口にしたのだ。兄は私に『目を覚ませ。お前はクレムリンのプロパガンダにだまされているだけだ』、と言います。

「信頼するお兄さんにそう言われて、どう返答するのですか」と尋ねると彼女は間髪入れずにこう答えた。「彼は西側陣営のスウェーデンに住み、西側諸国の情報に囲まれて生きている。その視点から世界を見ている。一方の私はロシアに住み、ロシアで発信される情報の中で暮らしている。彼は西側のフィルターを通して世界を見て、私はロシアのフィルターを通して世界を見ている。これの何がおかしいのか」。

西側諸国は西側諸国のナラティブで世界を見て

いるだけで、本当の中立などない、と言われているような気がした。この彼女の発言は、今も私の頭から離れない。

イスラエルやロシアといった国々では、自分たちの主張や考え方、ナラティブが外国で十分理解されず、受け入れてもらっていないという不自信がある。その不自信は「どうせわかってもえないんだ」という疎外感につながる。そして、疎外感を持つ国民どうしを逆に固い結束へと導いている。これが進めば分断はさらに深まり、対話もおぼつかなくなる。

だからこそ攻撃する側のロシアやイスラエルのナラティブや内在的論理、そして起点を正確に理解することが重要になってくる。彼らの次の一手を予想したり、対話や交渉を可能にしたりするために。

一つの事象に対して二つの正反対のナラティブや起点が存在する世界。私たちは様々な主張や価値観が正当性を競うかのようにぶつかり合う情報空間に生きている。分断やナラティブの対立を乗り越えるヒントは、その境界を行き来できるようになることにあるのではないだろうか。

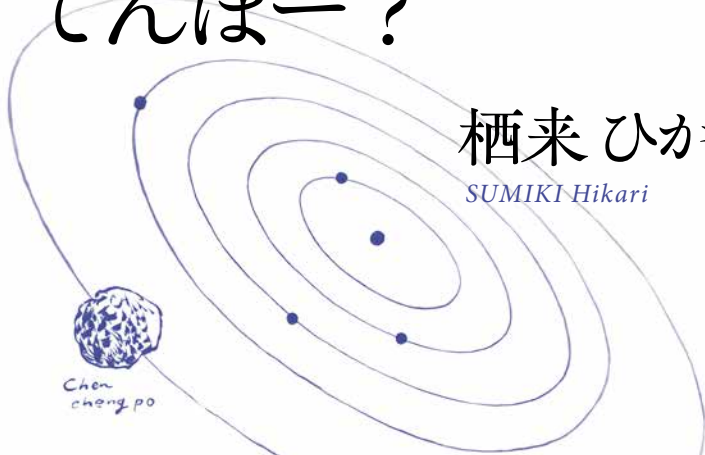
(つじ こうへい・NHK報道局記者／「BS国際報道2025」キャスター)



チェン・チェンポー？ たん・てんぽー？

栖来 ひかり

SUMIKI Hikari



小惑星「陳澄波」をめぐる 台湾の多声性

ポリフォニー

アリリシヤン
阿里山という二千メートル級の山岳地帯が台湾のおへその辺りにある。二〇〇七年八月六日、こ
こ阿里山の鹿林天文台でひとつの小惑星が発見された。直径は約二・二km、太陽の周りを約四・六三年かけて一周するこの小さな星は、二〇二五年一月、台湾のある画家の名前を取って、「Chenchengpo（陳澄波）」と命名された。命名を提案した中央大学天文研究所の葉永烜教授は、こうコメントしている——「陳澄波は平和のためにその芸術と生命を捧げました。その精神は、七八年後の今の台湾のみならず、宇宙においても記憶されるべきです」。

二〇二五年はちょうど、陳澄波の生誕一三〇年にあたる。台北で開催された記念展が話題だったこともあり、ニュースはすぐに台湾じゅうを駆け巡った。同時に、ネット上で激しい論争も巻き起こった。曰く、陳澄波のローマ字表記はいわゆる「中国語」（北京官話）読みの「Chenchengpo」ではなく、「台湾語」※1読みの「Tân Têng-pho」であるべきというのだ。名前の表記をめぐるそうした論争が

起こった陳澄波とは、一体どんな人物なのだろうか？

陳澄波を紹介する際の「台湾近代を代表する画家」というフレーズは、実は美術的な観点だけに留まらない。とりわけ象徴的なのがその生没年である。陳澄波は一八九五年、阿里山のふもと嘉義に生をうけ、一九四七年に亡くなった。一八九五年は下関条約で台湾が日本に「割譲」された年である。陳澄波が生まれたのは二月二日で、条約の調印は四月十七日。つまり陳澄波は生まれて二か月ちよつとで「清国人」から「日本人」になったのだ。

家は貧しかったが、父親は科擧の秀才で書物に囲まれて育った。成績優秀で一度は教師になるが、画家になる夢を諦めきれず三十歳で東京美術学校（いまの東京藝大）に留学。一九二六年には帝展に入選し、台湾籍の画家としては初の快挙となった。しかし、台湾出身者に対する差別のため、「内地」にも台湾にも美術教師の口を見つけないことが出来ず、中国に渡った。上海の芸術学校の教授として、安定した収入を得て台湾より妻子を呼び寄せ、画家として名を馳せた数年は陳澄波の人生で最も輝かしい時代だったという。とはいえ、それも長くは続かなかった。一九三三年、第一次上海事変が勃発し、日本への激しい排斥運動が起こった。日本の植民地だった台湾出身者として身の危険を感じた陳澄波は、引き裂かれるような思いで台湾に帰り、「日本人」にも「中国人」にもなれない国

家アイデンティティに苦しみながらも、精力的に台湾各地の美しい風景を描き続けた。郷土の「イマココ」を見つめたその作品には、暮らしを向上させていく近代化の波と失われていく伝統的な風景の混在が、いとおしむように塗りこめられている。

第二次世界大戦が終結し、日本の代わりにやって来たのが蒋介石率いる中国国民党であった。陳澄波も、多くの台湾の人々と同じようにこの変化を歓迎した。日本の植民地支配から解放され、台湾の人々が主体的に平等な社会を築いていく時代がついにやってきたと期待した。だが、それはすぐに裏切られた。「中国語」が共通語とされた社



上海在住時代の陳澄波 (1929 - 1933 年頃)
(提供：陳澄波文化基金会)

会で、「日本語」と「台湾語」しか話せない台湾の人々は公職から追いやられ、社会の決定権を奪われた。国民党と一緒に来た人々に独占された公務員のあいだでは汚職や横暴がはびこり、庶民の生活は苦しさを増す。そして、台湾民衆の不満と怒りはついに爆発した。

一九四七年二月二十八日、闇タバコを売っていた女性を殴った闇販売の取締員の発砲をきっかけに各地で激しいデモが起り、国民党政府がただちに戒厳令を敷いて、軍隊でそれを徹底的に抑え込んだ。この大規模な武力鎮圧事件「二二八事件」の犠牲者は二万人以上ともいわれ、現在の台湾社会にも深い亀裂を残している。陳澄波も当時、嘉義の市議会議員として市民を守るため軍との交渉に出かけたが、捕えられて裁判もなく嘉義の駅前で公開処刑された。事件に関しては緘口令が敷かれ、銃殺された陳澄波の名もタブーとなった。

「作品さえ残っていれば、夫の無実とその芸術的価値はいつか必ず認められる」と信じた妻の張捷は、政治犯の家族として監視を受ける生活のなか、四〇年以上にわたって自宅の天井裏に夫の作品を隠しつづけた。一九八七年、台湾の戒厳令が解除されて民主化が進み、一九九四年には政府が正式に二二八事件の被害者へ謝罪した。陳澄波の存在にふたたび光があたりはじめ、再評価が始まった。二〇〇七年の国際オークションでは、『淡水夕映』という作品が約九億円で落札。台湾画家のオークション価格としては今なお史上最高で

ある。この落札価格には芸術性のみならず、その死にまつわる悲劇性、そして台湾の近現代を象徴する存在であるという意義も込められている。

さて、小惑星「陳澄波」をめぐるローマ字表記論争は、こうした背景のもとに起こった。陳澄波の表記は彼の母語である台湾語の「Tân Tēng-pho」にすべきで、二二八事件で陳澄波を殺した側の言語にするべきではないというのだ。二〇〇〇年代以降、「自分は台湾人である」という台湾アイデンティティへの意識の高まりと比例して、台湾の主体性を考え、歴史を知りたいという意欲も強まっている。そこで、名前や言葉をどのように表記すべきかは現在進行形の課題であると共に、過去の犠牲を糧に社会をより良くしたいという願いの顕れでもある。ちなみに陳澄波自身、作品ごとのサインが日・台・中の表記とまちまちであることは、彼自身が揺らぎ続けながら生きた証であろう。

台湾に住む日々とは、現在は過去と地続きであることを確認しながら時間を重ねていくことの連続である。世界の状況が劇的に変化し不安の高まる昨今、外に出てふと夜空をみ上げる。目には見えずとも「陳澄波」という名の小さな星が、いつも頭のうえでちいさく瞬いていると思うと、心が少し休まる。

※1 南福建沿岸部をルーツとし台湾で発展した言葉で、台湾ローマ字とも言う。

(すみき ひかり・文筆家、台湾在住)

現実を肯定するための

ファンタジー

——ディズニーとPIXAR

柳澤田実

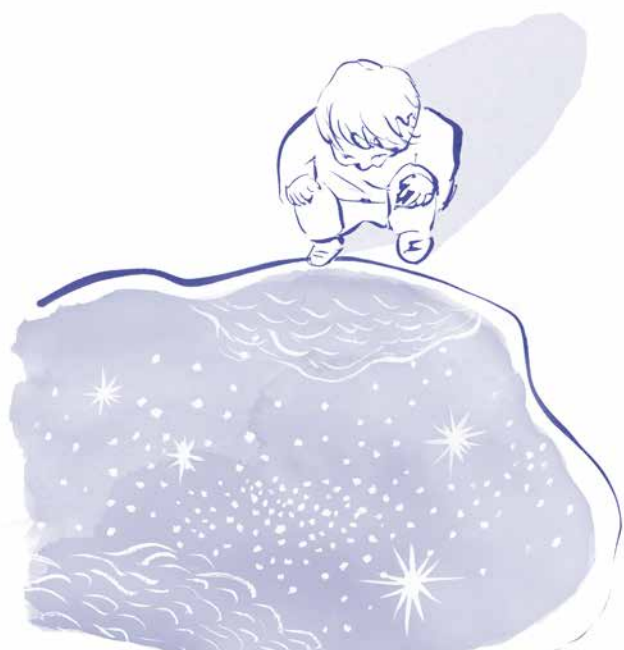
YANAGISAWA Tami

物語は「私たち」を成り立たせる手段

「大きな物語の終焉」というジャン・フランソワ・リオタールの言葉が、ポストモダンの到来を告げたのは一九七九年。その後、世界観を物語る伝統的な宗教やイデオロギーが衰退するに伴い、陰謀論など無数の「小さな物語」が度々流行し、二〇二五年現在、政治も含めた現実社会にまで影響を与えている。

脳科学者のアントニオ・ダマジオが述べるよう

に、人間は様々な知識を効率よく記憶する方法として「物語」を生み出した。また進化生物学者のロビン・ダンバーによれば、霊長類は集団の結束を強めるためにエンドルフィンというホルモンを分泌するグルーミングを行うが、人間は実際に他人に触れることなく同様の効果を生む行為として、笑う、歌う、踊る、食事を共にする、宗教儀式を行う、そして感情に訴える物語を語るようになった。つまり物語は、人間が「私たち」であるために続けてきた古くからの営為であり、文化なので



ある。

『物語が世界を滅ぼす(原題:Story Paradox)』(原著二〇二二年、邦訳二〇二二年)のなかで、著者のジョナサン・ゴットシャルは、陰謀論や詭弁が溢れる今日、誤った物語に支配されないように「物語に抵抗しろ」と主張した。けれども、人間が物語を捨てることはおよそ不可能なことだ。むしろ虚実の区別のつかない物語が溢れる今こそ、この混沌のなかでどのように「良い物語」を語り得るのかについて考えてみるのがよいだろう。

宗教に代わるストーリーテラー

としてのディズニー

先述のゴットシャルによれば、物語には大抵、道徳的問題、特に悪との戦いなどのネガティブな要素が含まれるそうだ。人間の心理には悪いことの方に注意を引かれるというネガティブ・バイアスがあるため、ニュースは常に悪いこと、人々の不安を喚起する内容に傾きがちだ。他方でフィクションにおいては、苦難の後にハッピーエンドになる勧善懲悪が圧倒的に好まれると言う。

宗教は、こうした道徳的な勧善懲悪物語を供給する役割を長きにわたって担ってきた。道徳的な「神」が歴史上に登場したのは約一万年前と言われるが、現世的な価値を超えた価値に人類が気づいたのが仏教や諸子百家、ユダヤ教の預言者たちが

出現する紀元前八百年から五百年頃だと言われる。この人類に認知的な大転換が起きた時代は「枢軸時代」と呼ばれ、広義の近代化はここから始まったとも言われる。その後、西洋を中心に工業化、産業化が推進された後、十八、十九世紀にかけて宗教が社会の中心から退く世俗化が起こるが、これ以降、マスメディアやエンターテインメントなどが宗教に取って代わり、大衆に勧善懲悪物語を提供してきた。

二十世紀後半からは映画やアニメなど、エンタメが大規模に産業化し、グローバルな影響力を持つストーリーテラーが生まれた。その代表の一つとして、ウォルト・ディズニーと彼の制作会社を挙げる事ができる。アニメーションによる世界観の供給とテーマパークという聖地の建設により世界中にフォロワーを得たディズニーを、宗教になぞらえる研究者も少なくない。同時にそれは一見、愛や美徳を説く伝統的宗教のようにも見えるが、内実は全く異なるという指摘もある。『The Gospel according to Disney (ディズニーによる福音書)』(二〇〇四年)の著者、ジャーナリストのマーク・ピンスキーは、ウォルトが伝えてきたことは一見道徳的に見えたとしても、どこまでも「徳を積み、努力すれば『私』は夢を叶えることができる」というアメリカ人らしい自己中心的思想だと述べる。

確かにウォルトは、宗教を決して否定はしない

ものの、敬して遠ざけていたようにも思われる。そもそも魔法の世界を描くディズニーの長編映画では、キリスト教という現実のアメリカ合衆国の伝統的文化と異教的な魔法が矛盾しないように、キリスト教要素が巧妙に取り除かれてきたとも言われる。言うまでもなく、こうしたことの背景にはキリスト教が歴史上、魔術やオカルトを排斥してきたという経緯もある。この方針はウォルトの死後も継続しており、例外的にキリスト教が物語の中心に登場する『ノートルダムの鐘』では、聖職者はヴィラン(悪役)だった。

おそらくウォルトの主眼は、今私たちの目の前にある現実とは全く異なる「現実」を作ることこそあった。このことに関連する印象的なエピソードとして、キリスト教福音派の有名なテレビ伝道師、ビリー・グラハムがディズニーランドを訪れた時のやり取りがある。「素敵なファンタジーですね(Nice fantasy)」とグラハムが感想を述べると、ウォルトは「ファンタジーはここにはありません。ここは非常に現実的だ」と応えたそうだ。[「ディズニーランドの」ゲートの外のほうがファンタジーだ」というウォルトの発言は、おそらく冗談ではなかった。自分こそが本物の「現実」を作るというウォルトの確固とした意思があつてこそ、ディズニーランドは、単なる一企業を超え、フォロワーたちに世界観を供給し続ける宗教に匹敵するような存在になったのだろう。



〈よりどころ〉はどこにあるのか



クリスチャンを自称する PIXARのアニメーターたち

こうしたデイズニーのやり方に対して、自身のキリスト教信仰を明言しているPIXARのクリエイター、ピート・ドクターやアンドリュー・スタントンは、だいぶ異なるアプローチを取っているように見える。おもちゃ(『トイ・ストーリー』や怪物たち(『モンスターズ・インク』)、そして擬人化された感情同士(『インサイド・ヘッド』)のドラマを描いた彼らの長編映画には、教会やキリスト教徒は登場しないし、あからさまな聖書のレファレンスも見られないので(『創世記』を明示的に参照している『ウォーリー』は例外的だ)、キリスト教との繋がりを意外に思う人もいるかもしれない。もちろん基本的にキリスト教国であるアメリカ合衆国で、どの組織にもクリスチャンが一定数存在すること自体は不思議なことではないのだが、PIXARが無神論者がマジョリティを占めるシリコンバレーの企業であることを思うと、その中枢に熱心なキリスト教徒がいることはやはり興味深いことだ。ドクターはルター派で育ったことを明言しており、スタントンは自身の背景について多くを語っていないが、保守的な(一部は福音派の)チャーチ・オブ・クライストの出身だと推察されている。

ウォルト・デイズニーは、既存の現実にとって代わる、新しい「現実」を作ることに関心だった。これとは対照的に、PIXARの物語世界は、私たちが日常的に生きている世界が、別の見方、枠組みによって捉えられることを示し、目の前の「現実」こそが美しいことに気づかせてくれるものが多い。ファンタジーはいわば「現実」に対する見方を深化させるための装置として機能している。最初のヒット作『トイ・ストーリー』では、子どもとおもちゃの世界を、おもちゃの視点から捉えると同時に、単におもちゃが物に見える唯物論的な視点からも捉えられるよう演出されていた。また『モンスターズ・インク』では企業文化、『ウォーリー』では消費社会が風刺されていたように、ファンタジー世界も、実在する社会に対する鋭い観察に基づいて設計されている。

またデイズニー作品の多くが、たとえばストリーでもあっても「夢を叶える私(me)」を中心にした物語であるのに対し、PIXARの作品は家族愛や友情、そして予想もしなかったような登場人物同士の助け合いを描くことが多い。スタントンは『ウォーリー』に関するインタビューで、「互いに愛し合うことは最も偉大な戒律」だと言い、ドクターは『カールじいさんの空飛ぶ家』に関するインタビューで、「真の冒険とは他の人たちと結び関係だ」と述べている。

さらに重要な特徴として、デイズニーが「決

して終わらない夢」を追求してきたのに対し、PIXARの物語世界には常に不可逆的な時間、つまり私たちが生きているのと同じ時間が流れている。そこには成長があり、老いがあり、終わりがある。この特徴は特にスタントンやドクターが関わった作品に顕著で、『トイ・ストーリー3』ではウッディの持ち主であるアンディが大学入学にあたっておもちゃたちに別れを告げ、『ファインディング・ドリー』では健忘症のドリーが子どもの頃の記憶を探し求め、『カールじいさんの空飛ぶ家』では妻に先立たれた孤独な老人が冒険に旅立ち、『インサイド・ヘッド』では主人公ライリーの成長とその過程で忘れられていく大切な思い出が描かれている。つまり喪失や悲しみこそが私たちの生きることの条件であるということが、彼らの作品の中心的なテーマになっている。

こうしたスタントンやドクターのコンセプトが印象深いのは、「ポジティブ病」(バーバラ・エレンライク)とも呼ばれるアメリカ文化のなかでは、喪失やそれに伴う悲しみは克服されるべきものとして捉えられるがただからだ。神学者の森本あんりによれば、アメリカに土着化したキリスト教では、現世での成功者を神に愛されたものとする「富と成功の福音」が強く、だからこそアメリカ人は「負けを理解できない」。「努力すれば私の夢が叶う」というストーリーを描き続けてきたデイズニー作品に、こうしたアメリカ文化特有の傾

向が共通して見られるのは言うまでもないだろう。また PIXAR の中でもフィリップ・バードが手がける『Mr. インクレディブル』や『レミーのおいしいレストラン』は個人の才能と成功にフォーカスしており、シリコンバレーらしい選民意識が表れているという指摘もある（エイドリアン・ドーズ）。

これらと対照的なスタントン、ドクターの監督作品の中でも、特に喪失や悲しみを肯定する姿勢が際立っているのは『インサイド・ヘッド』だ。感情を擬人化したキャラクター、「ヨロコビ」、「カナシミ」、「ビビリ（恐怖）」、「イカリ」、「ムカムカ（嫌悪）」が織りなすドラマは、制作開始から三年もの間、「ヨロコビ」と「ビビリ」を中心に構成されていたようだ。このプランが行き詰まった後、ドクターは、心理学者、ダッカー・ケルトナーの助言、そして自分自身の経験の回顧から、この作品で感情を題材に追求しているのは「人との繋がり」であることに気づき、悲しみこそが人と人を結びつけるという発想に至ったのだそう。『ヨロコビ』が当初厄介者とみなしていた「カナシミ」を、必要不可欠な感情だと認める物語はこうして生まれたのである。

現実と感情の間にあるファンタジー

『インサイド・ヘッド』の考え抜かれた描写では、単に悲しみが喜びによって報われるから肯定されるわけでも、悲しみ自体が自己憐憫的に肯定されるわけでもない。悲しみは、喜びをはじめとするほかの感情と切り離せない形で、大切な記憶を形成する核として、ありのままに肯定されている。それが複数の色彩の混じり合った、美しい記憶のボールが表現するものだ。

そもそもキリスト教のみならず伝統的な宗教が語ってきた物語とは、人が苦難を乗り越えるために「現実」を捉え直すための物語であり、目の前の「現実」こそが美しいことに気づくための物語であり、自分の「現実」を構成する様々な人や事物との繋がり豊かさに立ち返るための物語だったはずだ。アメリカ人らしい自己実現神話、「終わらない夢」を描いてきたディズニーのオリジナル作品が近年徐々に創造性を失い（二〇一四年の『アナと雪の女王』が最後の大ヒット作である）、それに取って代わるかのように、PIXAR のクリスチャン・アニメーターたちが、伝統的な宗教が提

供してきた物語の原点に立ち返りつつ、ヒット作を生み出し続けていることは興味深い。PIXAR は二〇〇六年にディズニーの子会社となったが、独立性を保ち、オリジナリティを追求し続けることに成功している。

精神科医のドナルド・ウィニコットは、宗教を遊びと結びつけ、両者は心と世界の境界、すなわち「経験の中間領域」で生じると述べた。この中間領域は、願っても変わらない外的な現実と、子どもの内的な希望と恐怖という感情的な現実との間に存在している。ウィニコットによれば、「神」とは基本的に「世界とは善いものである」という感情的なコミットメントにほかならず、そのような善さが実際には存在しないにもかかわらず、世界が善いものであると信じるために存在する。ファンタジーもまた感情的な現実と外的な現実の中間にある「遊び」にほかならない。現実離れた幻想に耽溺（たんとく）することなく、スタントンやドクターが生み出すリアルで美しいファンタジーは、現実を肯定して生き続けるために、これからも変わらず求められ続けるだろう。

（やなぎさわ たみ・関西学院大学神学部准教授）



〈よりどころ〉はどこにあるのか

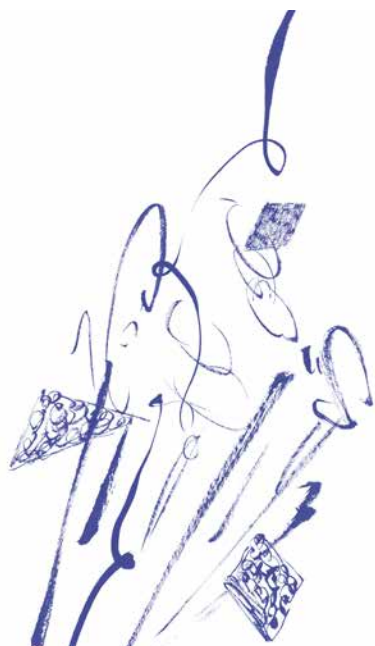


親鸞は ジャズ・ブルースである

——藤田省三の「歎異抄ノート」をめぐる

河野有理

KONO Yuri



政治学者・政治思想家である藤田省三の後期における代表作である『精神的考察』（平凡社、一九八二年）を収めた『藤田省三著作集』第五巻（みすず書房、一九九七年）には、付録として『歎異抄』を読む」が収録されている。これはもともと、藤田が一九七六年二月から四月にかけて行ったセミナーの記録である（なお、それに加えて一九七五年に行われたセミナー、一九七八年の自宅研究会での発言メモも一括で収録されている）。セミナーの開催場所は庄建設。その社長、庄幸司郎は建築

士であるが、藤田の著書を刊行した未来社との関係も深く、そのコネクションから、当時、さまざまな学者・知識人の邸宅・書斎の設計建築に携わっていた名物社長であった。このセミナーは一九七一年に法政大学を退職した藤田への生活支援も兼ねた委嘱だったと思われる。記録を提供したのは法政大学時代のゼミ生であり、『著作集』の編者でもあった本堂明であるが、この巻に『歎異抄』を読む」が収録されることについては、藤田からの明示的な指示があったので

あろう。というのも、『精神的考察』中の一篇「史劇の誕生『保元物語』の主題についての一考察」の『著作集』採録にあたり、新たに藤田自身の手になる『保元物語』論への概略的補註」が付されている。そこで藤田は読者に対し「後掲の「歎異抄ノート」もそうした背景を忘れないで目を通してほしい」（第五巻、八二頁）と指示するからである。ここで「歎異抄ノート」とされているものこそ、『著作集』第五巻に付録として掲載された『歎異抄』を読む」に他ならない。「忘れないで」

と注意をうながされる「そうした背景」については後述することにした。

最近になって発見したが、端的に言って、親鸞とは即興性という点ではジャズなのだ。反伝統的であるという点で無調音楽でもある。それに対して、高野山などは立派な声明をもっている。それが親鸞の弾圧の理由に一貫して挙がっている。権力によるブルースの否定。音楽の否定。親鸞からその音楽性を抜いては「けない」。(『歎異抄』を読む『著作集』第五巻、三一一頁)

「念仏を唱える時には、相当激しく上半身を動かしたらしい」(同右)。念仏を唱える親鸞の動作の身体性への着目の直後に繰り出される藤田のこうした刺激的な断言は、しかしそれだけでは含意がよくわからない部分も残る。そこでさまざまなコンテキストを補足することで、この含意の射程に迫ってみたいというのがこの小文の狙いである。

丸山と藤田——親鸞の評価

まず、参照するべきは、藤田の師であり、やはり同じく政治学者・政治思想家で日本政治思想史を専門にした丸山眞男の議論だろう。著作や論文で仏教に触れることの少なかった丸山であ

るが、東京大学法学部での講義「日本政治思想史」においては仏教、とりわけ「鎌倉新仏教」を高く評価していた。たとえば丸山は一九六三年・一九六四年度講義において講義の最終盤に鎌倉仏教を配し、「親鸞・道元・日蓮などに代表される鎌倉新仏教の思想的著作は……そこに流れる体験の深さ、情操の豊かさ、論理の透徹さは彼らをして優に世界の第一級の思想家に伍せしめるに足りる」(『丸山眞男講義録』第四冊、東京大学出版会、一九九八年、二二二頁)とまで評している。なかでも親鸞は、その教説における信仰の内面化と純粹化(その反面としての呪術や習合の否定)、世俗的価値の転倒、政治権力への依存の峻厳な拒否といった観点から、「人格の内面的自律性の確立」(同、二五〇頁)を志向した宗教者として高い位置づけを与えられていたのである。

ともあれ、丸山のこうした評価は、現在の視点から見れば、その高低はともかく、評価の際の視点についてはいささか問題があるというのが一般的な見方だろう。というのも、「宗教改革」(同、二〇七、二七〇頁)や「宗教的絶対者」(同、二二七頁)といった語彙が講義で使用されることにも表れているように、丸山は「鎌倉新仏教」をキリスト教における宗教改革と類比しているからである。さらに、社会学者M・ウェーバーの宗教論を補助線として、信仰の内面化と呪術からの解

放(合理化)の過程に宗教のある種の進歩や発展を読み込もうとする姿勢が色濃い。要するに、ウェーバー的な視角で切り取ったプロテスタンティズムをいわば物差しとして、日本の仏教がそれとどれだけ近い(遠い)かという問いの立て方になってしまっているのである。

藤田の場合はどうであろうか。藤田の見たところ、『歎異抄』に現われている親鸞の精神の要点は、「善悪の彼岸に立つこと」、「自分の覚悟の深さ」、「自由であること」の三点にあるとされる(『著作集』第五巻、二九五頁)。「善悪の彼岸」をめぐっては当然、ニーチェが参照されている。「善悪の彼岸に立てるのは、ニーチェになることではなく、本当に信じることは何か。(キエルケゴールの如く)」(同、二九四頁)。ニヒリズムを通じて「善悪の彼岸」に至るニーチェと、信仰によって「善悪の彼岸」に至るキエルケゴールとが対比され、後者のあり方が親鸞に重ね合わされる。また、ここでの「自由」は仏教語の「自由」と同じではない。それは「覚悟(コミットメント)」(同、二九四頁)と結びついており、また『マタイ伝』の参照のなかで用いられる、れっきとした西洋的語彙である。おそらく『マタイ伝』第八章二一―二二節、父の葬儀を願う弟子に「死せるものをして自ら葬らしめよ」といったイエスの言葉を、「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にて



も念仏まうしたること、いまださふらはず」(『歎異抄』)と重ね合わせて理解したものであろう。丸山のようにプロテスタンティズム的な宗教理解が前面に押し出されているわけではなく、ニヒリズムとの「紙一重」性が強調されている点の特徴だが、やはり西洋思想的な枠組みのなかでの評価である点は丸山と同様といえる。また、「ここで仏教が初めて普遍宗教になる」(同、二九六頁)など、「普遍宗教」という解釈枠組みが維持されていることも丸山と同じである。普遍的、超越的な絶対者の前に、周囲の環境や家族の同調圧力に飲み込まれずに、個人として立つ。そうしたモチーフがやはり強調されているのである。

「そうした背景」——崩壊感覚

それでは、藤田の理解は所詮は丸山の亜流に過ぎないのだろうか。丸山と藤田の違いは、親鸞や『歎異抄』の理解それ自体というよりは、それらがどのような「状況」に向けて差し出されたかにあったと見た方がよい。それはたとえば次のような「状況」である。

教科書レベルでは、古代末期は後になって権力を握るのは確かに武士団だが、しかし同時に傀儡、遊女などが初めて日本社会の表面に出てきた時期でもある。親鸞の、根本から考

えるその精神は、この「状況」と対応している。
『著作集』第五巻、二九五頁

武士団よりも「傀儡」「遊女」に注目した時代理解、それこそ、『歎異抄』に関するノートが藤田の『精神的考察』にわざわざ新たに収められた所以である。『精神的考察』所収の論文「史劇の誕生『保元物語』の主題についての一考察」(一九七六年)にやはり新たに付された「概略的補註」で藤田が注意を促した「そうした背景」もまた同じである。

「武者の世」(慈円)の画期となった保元の乱を題材とした『保元物語』について、藤田が注目するのは幼少の近衛天皇と真の実力者・鳥羽上皇の二人のほぼ同時的な死をめぐる劇的構造である。とりわけ、古代以来の王朝国家の最終形態である院政の中心にあった鳥羽上皇が、自身もまた罪深い「凡夫」であるとの無力感や罪責感にさいなまれながら、素性も怪しい一介の「巫女」の宣託によりなすすべもなく死んでいくという伝承は、「古代末期からの仏教上の末世観」が「此処でついに神聖古代宮廷の核心的中心をまで貫き通した」ことを示す精神的な「画期的事件」を示しているとされる(『著作集』第五巻、六〇頁)。

藤田がここに見出す時代状況は一言で言えば、主客、上下が「分解」し、「逆転」する「社会革命」の時代である(同、七九頁)。「史劇の誕生」後に

登場した網野善彦『無縁・公界・楽』(一九七八年)を一つの契機に沸き起こった中世史ブームをおそらく念頭に置きつつ、「概略的補註」で藤田は、本来「社会革命」としての意義をもっているはずの中世を「平凡な「転換期」……とかいう空しい陳腐な言葉で呼んで平然としている現状」(同、八〇頁)を嘆いてみせている。「まことに「逆転」の時代というべき……「転換期」などという生易しい時代ではない」のである(同、八二頁)。

実は丸山真男も先ほどの講義のなかでは、慈円の史書『愚管抄』等に取材しつつ、この時期の末法観とそれがもたらす「崩壊感覚」を強調していた(『丸山真男講義録』第四冊、二一〇頁)。だが、丸山の場合にはそうした「崩壊感覚」と「社会的アナキー」(同右)を凝視し続けることはない。「末法的終末感」は、やがて「社会的な危機感をこえて、人間そのものの危機意識の自覚へと成長してゆく」とされ、「宗教行動」が「個人の精神のなかに内面化され」「絶対者と個人が中間的な媒介なしに、向き合う」(同、二二七頁)ためのいわば前段へと解消されてしまう。そして親鸞、道元、日蓮によって果たされた「内面的人格の自律」はやがて社会的な連帯へと向かい、一向一揆あるいは武士のエートスへと引き継がれていくとされる。ちなみに、丸山のこうした見方に対し藤田が違和感を抱いていたかどうかとは、たとえば

『愚管抄』に「歴史哲学」を見てとる丸山への当てこすりのなかにその一端が示される。藤田自身は石母田正を引きながら『愚管抄』を「歴史哲学」としてではなく、「同時代史」「現代史」として見るのだという（『著作集』第五巻、七二頁）。

これに対し、藤田の特徴はあくまでこの「崩壊感覚」のなかにとどまり続けることにあった。また、そのなかから現れる「風俗の面でも宗教思想の面でも世間を横行する新種の人々」（同、七九頁）に着目することになった。傀儡や巫女、そして町中の聖、あるいは遊女から今様を習い集め『梁塵秘抄』を編んだ後白河法皇。後の時代の主人公へと成長していく武士団ではなく、上下の「逆転」の時代に現われた異形の人物たちの方に藤田の眼は注がれる。言うなれば藤田は、親鸞における念仏と、後白河における今様を並べてみようとするのである。親鸞はジャズであり、ブルースであるというのはいささか脈絡のなかで理解されるべきである。

異端の百鬼夜行

藤田が丸山の影響圏から脱して独自の体系を模索するのは一九六七年から一九九九年にかけての滞英後と言われる。社会人類学及び古代文献の渉獵を通じて切り開かれた境地は七〇年代から八〇年代に

かけての諸論文に現われ、その結果が『精神史的考察』（一九八二年）というのが一応の定説である。「史劇の誕生」に現われた「社会革命」の時代としての中世という把握は、まさに藤田の新しい「精神史」の成果であった。

だが、その萌芽は「丸山門下」の一員だった時期にもすでに見られる。藤田が渡英直前まで執筆していた原稿、丸山が編著者として刊行予定だった筑摩書房『近代日本思想史講座』第二巻「正統と異端」における自身の担当分だった「異端」論の原稿のなかにそれは見えている（『著作集』第一〇巻に収録）。

この『異端論断章』で藤田は、キリスト教的な「異端」の発生の経緯（例えば、三位一体説と公会議）と対比することで日本における「異端」のあり方を説明しようとしている。この対比を藤田は、やはりM・ウェーバーによりつつ、呪術からの解放と秩序の合理化として特徴づけられるキリスト教社会に対する、呪術それ自体の合理化が行われる天皇制社会として整理する。そうした社会において正統たる天皇制はいわば公的呪儀として立ち現れることになる。こうした正統を脅かす異端の諸類型のなかで、藤田がとりわけ注目するのは公的呪儀としての天皇制に対応するところの「呪儀異端」の「百鬼夜行」である（『著作集』第一〇巻、五七頁）。

藤田の『異端論断章』は未完に終わり（論集『正

統と異端』全体も未完に終わった）、様々な天神地祇が「百鬼夜行」する社会という「異端」のイメージがそれ以上深められることはなかった。『異端論断章』においては（呪術からの解放）を果たし（合理化）されたキリスト教社会がある種の範型として提示されていたのは確かであり、その意味で「百鬼夜行」への評価は低いようにも見える。だが他方で、この「百鬼夜行」が持つポジティブな可能性への期待もほのめかされるのである。想像をたくましくすれば、そうしたいわば（呪術の花園）としての社会のイメージは、「史劇の誕生」で描かれた社会的アナキーとしての中世という像に連なっていくものであったと見ることも可能であろう。

親鸞もまたこの『異端論断章』のなかに見える。『歎異抄』——これもまたもとは「異義」を「歎」くための書であった——は、こうしてみると、前期藤田と後期藤田をつなぐ蝶番のような役目を果たしたテキストの一つであるのかもしれない。「百鬼夜行」状態の社会的アナキーのなかで、藤田が目指す「正統の自覚に拠って立つ異端」（同、二八頁）、つまり自ら正統たんとする異端の一人として親鸞の姿が浮かんでいたのではない。上半身を激しく動かし、ジャズやブルースのように念仏を唱える彼の姿が。

（この ゆうり・法政大学法学部教授）



（よりどころ）はどこにあるのか



「よりどころ」を 求めるということ

本多 弘之
HONDA Hiroyuki

一、「よりどころ」ということ

今回の『ajiali』の特集テーマは、現在の錯綜した価値観の中でもがいている私たちにあって、何が本当の「よりどころ」たりうるのか、ということである。すでに宗教的な權威が人間の理性にとって必ずしも絶対的な意味を持たなくなつて久しい。そして、宗教的な伝承の相違が、民族間の対立を深める一因になっている。この時代を生きる私たちは、一体何を根拠に正当であることを判断すればよいかという問いさえ、起こすことが困難なのかもしれない。

釈迦牟尼世尊が発心したのは、世間的な価値の煩わしさや、この生存のもつ有限性に気づいて、自己自身の意味を求めようとの意欲に立ち上がったということではなかったか。その根本的な問いをかかえて、当時世間に流行していた難行苦行を試みて、その無意味さに気づき、自己自身の問いを見つめるべく菩提樹の下で静かに座り続けられたとされている。釈迦は自己に起こった信念のありかを「菩提^{ぼだい}」であるとし、それ以前の自己の意識が迷妄の状態であつたと気づき、その信念内容（菩提）を無我の智慧として表現していかれたとされている。この釈迦の意識翻転の事態か

らすれば、私たちの依り処を求める現在の行為も、迷いの中の暗中模索になっているのではないかとすら思われる。依り処を求めることで、自己自身を問うことが忘れられているのではないかと。

そもそも、ニヒリズムの思想が吹き荒れて以来、宗教的な「依り処」が權威を喪失したことで、都市住民の意識は、「根無し草」などという言葉で表現され、文明の発展とともに人間社会が荒廃の一途をたどっているとさえ言えよう。こういう危機的事態に対し、新しい「依り処」の構築が待たれているのではないだろうか。

二、存在の事実を成り立たせる因縁

仏教の法話会のはじめに唱えられることがある言葉に「三帰依文」がある。その出だしに「人身受けがたし、今、すでに受く」とあり、その後に「仏法聞きがたし、今、すでに聞く」とある。人間存在として現に今、ここに生きている、という事実をしっかり受け止めてみなさい、そこから仏法を聞くことも始まるのだということである。そしてそれは、生命ある無数の存在の中に、人間であるということは、決して当たり前ではなく、滅多にないような条件や不可思議なる因縁が今すでに与えられているのだと気づきなさい、というメッセージでもある。

つまり私たちが当たり前にしている事実も、不思議な因縁の重なりを背景にして成り立っている。しかし、世の中で不思議な出来事と言う場合は、この不思議な因縁そのものを意味しているのではない。例えば、曇鸞に五不思議という言葉がある。それは親鸞も取り上げているから、良く知られているのだが、この世の一般的な不思議さは、人間の頭では納得できないような事柄である。様々な生命存在があることも、人間に生まれてもいろいろな人種や国土や歴史などの違いがあること

も、なぜかと問われても容易には説明がつかない。さらには自然現象なども、現代に至ってもよく分からないことが多い。日本は災害の多い国土だとされるが、そのことを受け止めることはたやすいことではない。それに対し、仏法力不思議ということが、曇鸞によって提起される、もつとも課題とすべき不思議なのである。

三、因縁の重なり

曇鸞は、この世において一般に考えられる不思議さを四不思議としていて、それに対し、一般には見過ごされていることを、第五番目の仏法力不思議として示している。それを天親菩薩が表している浄土の因果であるとする。浄土の因果とは、因である仏土不思議とその国土を説き出すものに、法蔵菩薩の修行の大願業力の不思議さと、果である阿弥陀如来の善住持力があるというのである。こう示されても、それが私たちに与ってはまるで何を言わんとしているかさえ理解できないであろう。

別の箇所では、曇鸞は願力成就ということを示しているのだが、このことから示そうとしたことと、それを受け止めた親鸞の気づきに

ついて、試みに次のように考えてみたい。我々が普通には、不思議とさえ思うこともなく、ごく当たり前の事柄として問題にもしないことと、それが実は私たちの意識していること自体に深く根を張っている「自我意識」のあり方であり、その自我意識の罪深さに気づかせることが、仏の大慈悲の心であって、その大悲が本願力を説き出し、本願の因果として浄土の力を示しているのだ、と考察してみてはいかがだろうか。

それを曇鸞は、「法性法身に由りて方便法身を生ず。方便法身に由りて法性法身を出だす」(『浄土論註』、『聖典』〔第二版〕三三二頁)という。すなわち、目には見えない形のないこと、それを比喩的に形あることとして表現することで、私たちに気づきを語りかける。そこに、「畢竟依」(『讚阿弥陀仏偈』、『聖典』〔第二版〕三六七頁)とも言われる、究極的な「依り処」が教えられる意味があるのだ、と。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)

「おしやれ」との出会い

マーサ・ナカムラ
NAKAMURA Martha



中学三年生の頃、駅前の書店で日課のように立ち読みする本があった。

省略語はなるべく使わないこと。どんな状況でも、ゆつくりと丁寧に、笑顔で発音します。尊敬語や謙譲語、「ごきげんよう」や「くあそばせ」など決まり文句もできることならマスターしたいものです。（『美輪明宏のおしやれ大図鑑』美輪明宏著／集英社）

この後には、美輪明宏さん直伝の「美しい日本語会話例」が続く。

「やっべー！」は「あら、困りましたわ。どういたしましょう」。「その話、マジ？」は、「ご冗談ばかり。それ、本気でおっしゃっているの？」。初めてこの本を手にとった時は、立ち読みしている書店で大笑いしそうになった。家に帰ってからも興奮が冷めず、母親にこの本の話をした。『うぜえよ！』は『本当に煩わしい方ですわ。』って、言うんだって」

母も笑っていた。隣で聞いていた父も、おかし

そうに笑っていた。美輪さんの言葉はあまりにもわたしの日常生活からはかけ離れていて、まるで「お嬢様ごっこ」を突如として始めたようなおかしさがあった。

それからしばらくの間、立ち読みを続けて、ある時思い切って購入した。税抜きで一六〇〇円。毎月のお小遣いとして二千元もらっていたわたしにとっては、本当に清水の舞台から飛び降りるような気持ちでレジに持って行ったことを覚えている。

当時わたしは、最寄り駅まで車で三十分もかか

るような埼玉県の田舎町から、東京都千代田区に

ある中高一貫の女子校まで、片道一時間半もかけて通っていた。東京の私立の女子校に通ったら、どんな勉強ができるのだろうと憧れて、純粹な知的好奇心から、自分で親を説得したのだが、結局なにが起きたかと言うと、大好きな勉強に集中できなくなるほど、人間関係で思い悩むことになった。

クラスで人気のある、「面白い」と評されている女の子ほど、「うざ」「きも」「しね」「だる」といった省略語しか話さない。それでも、彼女を取り巻くクラスメイトたちは腹をかかえて大笑いしている。

この刺激的な省略語こそが、都会の女の子らしさなのだろうかと思った。それで、わたしも真似してみた。わたしだけでなく、周りの子たちも真似していた。

刺激的な言葉は人を振り向かせる。穏やかな言葉はつまらない。はつきりと、そう考えていた。とても歩いては帰れないほど、家から遠く離れた教室にいて、クラスメイトたちが笑ってくれると、本当に初めて息ができるような感じがする。溺れないようにするための、苦しい息継ぎだった。ほとんど過呼吸状態だった。

『美輪明宏のおしゃれ大図鑑』という本の面白いところは、服装や立ち居ふるまいといった外面のみに言及するのではなく、言葉や精神性などの目に見えない部分、内面の「おしゃれ」について

も触れているところである。

美しい言葉をお使いなさい。どんなに素敵なブランドもののお洋服を着ていても、言葉遣いが汚いと、まるで借り着のようで似合いません。（「たかが言葉、されど言葉」『美輪明宏のおしゃれ大図鑑』）

それまでわたしは、人のために言葉を発しているだけで、自分のために言葉を選ぶなど、考えたこともなかった。服を選ぶように、おしゃれをするように、自分で自分の言葉を意識的に選ぶ取るという考え方は、当時のわたしの常識をひっくり返すものだった。言葉の軸が、他者から自分に移る。

目には見えない言葉に、美しい、醜いという基準があるとは思わなかった。言葉の美醜を見定めようとするうちに、今までなんの感触もなかった「言葉」の手触りを感じるようになった。温かい、ふわふわしている、無機質で冷たい、きれい……。言葉の美醜は間違いなく、目で見るものではなく、心の目で感じとるものだ。「本当に大切なものは、目には見えない」という『星の王子さま』の有名な言葉があるけれど、この世界には、目には見えないものが確かに存在するということを、わたしは言葉から教わった。

言葉は、音数が減るほど素っ気なく、味気なく

なるようだ。逆に、音数を増やすほど、味のある響きになる。この法則も、美輪明宏さんの本から学んだ。例えば、人に椅子を勧めるとき。「座れ」。三音。指示ははつきりと伝わるが味気ない。「座りなさい」。六音。すこし柔らかくなった。「どうぞ、こちらにかけてください」。十四音。温かくなった。「お疲れでしょう、どうぞ、こちらの椅子をおつかいください」。二十五音。耳にした人は、その心遣いに思わず笑顔になるだろう。まるで料理の隠し包丁のように、音数をくわえるほど、味わい深い、ぬくもりのある言葉に変わっていく。この法則は面白い。ある言葉を伝えるために、音数を増やしていく遊びは、いまでも無意識のうちにしていることがある。ただの素材でしかなかった言葉が、立体的で美しい言葉へと変化を遂げていく。この遊びが、わたしを詩人にしたのかもしれないと思うことがある。

学校の校則は厳しかった。流行のシヨップバッグを持つていけば必ず没収されて、眉を整えることも禁止されていた。でも内面のおしゃれ、心のおしゃれは、誰も取り上げることはできない。言葉の手触りを確かめ、目には見えないものが確かに存在することに気づいたことで、この世界は、いまわたしが目には見えない教室よりも、ずっと広いものであることを知ったのだ。

（マーサ・ナカムラ 詩人）

地図にならない 「地」を踏みしめて

——地下という垂直空間からの
地上への問いかけ

北川真也

KITAGAWA Shinya



何気なく道を歩き、車を走らせる日常からすれば、とても想像がつかないことだった。二〇二五年一月二十八日、埼玉県八潮市の交差点で道路が突然陥没し、走行中のトラックが穴へと転落したのである。ニュースを聞いて、衝撃と恐怖を覚えながらも、運転手の救助はすぐになされるだろうと、どこかで思っていた。だが、遺体となった男性が地上へ引き上げられたのは、事故の発生から三カ月以上も経過してからのことだった。どうしてもすぐに引き上げられなかったのか。道路に空い

たこの穴は幅が四〇m、深さは一五mにまでに達していた。一五mとは、四〇五階建ての建物の高さに相当する。陥没の原因は、硫化水素の発生による下水道管の破損であるという。穴のなかにはコンクリートのがれきが重なり、大量の汚水が流れ込んでいた。厳しい物質的条件にある地下からの救助は、想像するよりもはるかに困難な作業を要するのだろう。

道路という平面に、予兆もなく穴が空き、地下への垂直空間が現れる。普段、道路の下を意識することはない。地下は未知であり、危険な場所に思える。列車の踏切下の地下通路がそうであるように、電気があっても仄暗く感じられる。しかし、地下には下水道管や水道管、ガス管、雨水管など、都市生活を支えるインフラが張り巡らされてもいる。地上からは見えない地理的世界がある。

「地上」という言葉は、地面に広がる平らな空間を連想させ、地下をあたかも舞台裏のように扱い、我々の意識や記憶から消してしまおう。しかし、それは確かに存在している。普段見過ごされてしまいう「垂直空間」、つまり深さのある空間について考えることは、実のところ、資本や国家が開発や戦争によって大地を限りなく破壊していく情勢において、土地からは離れられない人間の生がいかなる命運にあるのかという疑問、別様に言えば、社会を根本から問い直すほどの疑問へと、我々を誘い込む。

*

二〇二五年六月十三日、ガザのパレスチナ人のジェノサイドを実行し続けるイスラエルは、イランに先制攻撃を行った。イランの核関連施設をはじめとする多数の標的への空爆だった。核開発に関する確かな証拠は示されていないが、 Netanyahu 首相によると、イランが保有するウランの濃縮度は核爆弾に転用可能なほどとなっており、イスラエルの存続を危機にさらすのだという。しかし、イランの核施設には地下がある。とりわけ、山岳地帯にあるフォルドウ核施設のウラン濃縮施設は、地下八〇〜九〇mの位置にあり、堅固な防衛体制が敷かれていると推察される。イスラエルが自国の兵器でどれほど空爆したところで、完全な破壊は難しい。そこで、イスラエルに最大の軍事支援を行う米国の参戦が求められた。米国は、地下六〇mの地点まで到達してから爆発する大型爆弾バンカーバスターを有しているからである。六月二十一日、米軍はバンカーバスターを投下した。六発〜一四発と言われているが、それは地下深くを破壊するためである。トランプ大統領は、この爆撃でイランのウラン濃縮施設は完全に壊滅したと強く主張した。

しかし、爆撃後の衛星画像をいくら見ても、ウラン濃縮施設が完全に破壊されたかどうか、本稿執筆の時点（二〇二五年六月末）で、その真相は

はつきりしない。そもそも衛星画像の視点——爆撃者の視点でもある——は、上空から地上を見下ろすものであり、そのまなざしは地下には届かない。衛星画像は平面でしかないのだ。

*

我々はこのように世界を見下ろすことに慣れている。その最たる例が、地図を見るときである。地図を見るとき、我々は世界を見下ろしている。今日では道に迷えば、すぐにスマホを取り出しグーグルマップを見る。自分がいる位置、周辺の道、目的地までの道を確認する。このとき、自分の身体は地上のある地点に物理的に存在している一方で、地図を見る自分の眼は、まるで上空に位置するかのようである。イランの地図を見る眼は、イランを見下ろす上空からのまなざしとなる。中東の地図を見る眼は、中東を見下ろすまなざしとなる。ならば、世界地図を見る眼は、世界の大地全体を見下ろす上空からのまなざしである。

しかし、大地の全体を見下ろせる位置など上空にあるのだろうか。実際に上空へ舞い

上がって、大気圏を抜け、宇宙へと飛び出せば、そのような位置が存在しないことにすぐに気づく。この惑星は球体なのである。地球の裏側は見えない。そもそも太陽の光が当たらない部分は真っ暗である。世界全体を見下ろし、一望できる位置などどこにもないのだ。

このありえない位置からのまなざしは、この世界、この宇宙の時間的・空間的条件を超越しているがゆえに「神の眼」とも言われる。このまなざしは、三次元の地球から一つの次元を取り去って、二次元の平面へと改変する。それは世界全体をまさしく一望するため、見渡すためにほかならない。



地図学的理性の象徴——イスラエル軍によって620の格子へと分割され統制されるガザ

(資料: By Open Street Map - Open Street Map, CC BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=141613639>)

神の眼である限り、そのまなざしは全知全能たろうとする。この世のいっさいの存在物を地図化、つまり地図上に確実に可視化できると自負する。目的地への道はどこにあるのか。資源はどこにあるのか。商品はどこを移動しているのか。「テロリスト」はどこにいるのか。高濃度ウランはどこにあるのか。すべてを見、すべてを知り、そして統治する。世界を地図へと還元してしまう「地図学的理性」と呼ばれるこの西洋の技術は、近代における資本と国家の活動を下支えしてきた権力装置でもある。

しかしながら、この近代の地図学的理性は今日、根源的な危機に見舞われていると思われる。手前味噌だが、拙著『アンチ・ジオポリティクス』（青土社、二〇二四年）では、移民・難民の移動性を中心に、新型コロナウイルスや「テロリスト」の移動性など、地図化しきれない統治困難な地球規模の流動が地図学的理性の働きを崩していることを描出した。他方、本稿で問題となるのは、地図学的理性があたかも存在しないかのごとく封じ込めてきた地球の垂直性、三次元性の現出である。

地理学 (geography) のついで「地 (geo)」とは何だろう。筆者は人文地理学、特に政治地理学を専門としてきたが、領土の研究であれ、地域の研究であれ、グローバル化の研究であれ、きまって平面的なイメージ、つまり地図的な世界が前提とされてきた。しかし、今や「地」は平面には限ら

れない。ここ一〇〜二〇年の英語圏の地理学では、地下（また空中）にまたがる垂直的また立体的なものとして「地」を捉え直す動きが起きている。

*

リニア中央新幹線という巨大インフラの建設が進められている。JR東海によると、東京・品川駅と名古屋駅の間をリニアは四〇分で結ぶ予定だという（現在の新幹線は八七分）。両駅は最短距離で、つまりできるだけ直線に近い仕方ではある。しかし、この直線が横断する数々の土地には、当然、すでに数多の住宅があり建物があり山並みがある。すべてを立ち退かせたり収用したりするのは不可能だから、リニアは地下へと介入する。品川―名古屋間路線の八六％はトンネルだ。その長さは二四六kmにも及ぶ。山岳部であれば、三〇〇m級の山々の下に長大なトンネルが建設されるため、例えば、南アルプストンネルであれば、その最深部は一四〇〇mにまで達することになる。ウラン鉱床の間を通り抜けるトンネルも掘削される。一方、都市部では、地下四〇m以深にトンネルがつけられる。とういうのも、四〇m以深の空間には、地上に住宅群があっても、地上の所有者の権利は届かないからだ。そう定めるいわゆる大深度法（二〇〇〇年）に依拠し、「公益上の必要がある」と国土交通大臣に認められたなら、事業者には地上にいる人間（地権者）の承諾も補

償も不要となる。自宅の真下で、トンネル工事が長期間行われ、自宅の真下を時速五〇〇kmのリニアが走り続ける。地下はいったい誰のものだろう。

地図学的理性は、地下を見通すのだろうか。そのまなざしが可視化できるはずの地上すら十分には見渡せずとも。リニアのトンネル掘削工事の途中に限っても、予測できない地下の土や岩、空気、水などの物質の運動が引き起こされている。そしてその運動の影響は地上にまで現れている。水枯れ、湧き水の発生、地盤沈下。掘削工事が出る大量の残土（有害物質を含む）の処理。延長される長期の工事が住民生活に及ぼす悪影響。トンネル工事での労働者の死亡・負傷事故。また道路陥没の危険性も指摘される。

このようになお不確定で不可視的な空間であるにもかかわらず、資本の地下への侵襲は加速している。それは地下が資本に残された数少ない、広大なフロンティアとみなされているからだ。膨張を続ける資本の運動は、世界を平面的のみならず、垂直的にも植民地化する。

まったくな世界で死と隣り合わせの過酷な労働を強いられてきた（女性を含む）坑夫たちの経験が教えてくれるように、資本はエネルギー資源を求めて、いかなる犠牲が出ようと地下へと侵襲する。気候危機の今日でも変わらない。デジタル化が進み、もはや手放せないスマホやパソコンといったIT機器の生産には、リチウムなどのレアメタル

（希少金属）、なかでもレアアース（希土類）が必須の資源となっている。加えて、爆撃が常態化する世界では、引き続き石油やガスといった化石燃料の採掘による燃料確保、利潤追求も止まらない。

しかし、資本による資源の略奪は、今や広大な深海をも包囲する。まっくらな深海からニッケルやコバルト、マンガンなどの鉱物を採掘、略奪し、所有する。五〇〇〇～六〇〇〇mという深海層の海底にまで侵入する。それは国家の領海内、排他的経済水域（EEZ）内には限られない。国連海洋法条約によって国家が管轄できない「人類の共同財産」と定められた、広大な公海の深海底にある鉱物資源の開発すら進んでいる。こうした活動

が、なおも未知である深海に、そして地上にどのような影響をもたらすかはわからない。

*

地下は、地球を破壊し続ける資本・国家が思い通り操作できる物質的空間などではない。かつてベトナムでは、南ベトナム民族解放戦線が二五〇kmに及ぶ地下トンネルに身を潜めながらゲリラ戦に従事した。そして、ナパーム弾で何度も空爆を行い、枯葉剤を撒き、地上軍をも投入した米軍を追い出した。

ガザにも、地下トンネルがある。二〇〇七年のイスラエルによるガザ封鎖以降、外部とつなが

るこの空間の重要性はより増したであろう。ガザのパレスチナ人の生活にとつての経済的重要性であり、抵抗諸組織にとつての軍事的重要性である。トンネルの総距離は五六〇～七二〇kmにも達していたとも指摘される。

しかし、パレスチナ人の解放闘争と地下空間との関わりはもつと昔からある。トンネルは入植者の攻撃から身を守る避難の空間だった。だがそれだけではない。土地を失っ

たパレスチナ人たちは、地下を掘り続け、地下において、地下を通じて、連帯と闘争を積み重ねてもきたのだ。そこから地上の土地へと舞い戻るために。

地下の運動は、地上へと湧き上り、地上を急襲する。ただしここでは、おのれの生存と尊厳のため、資本主義的・植民地主義的な膨張に抗うという意味でのことだ。

地図学的理性の危機からあらわとなるのは、単に二次元の平面に、深さという垂直の次元が加わって三次元の空間になった、というような単純なものではない。今や空間の個々の次元、つまり平面と深さを別々に扱うことはできないのだ。この空間は、地下と地上を横断し混濁させる運動的、生成的、そして立体的なものとして理解される。それこそが、我々が現に生き、足元に感じている大地、地球にほかならない。人間は地図の上を歩き、地図の上を生きるのではない。そうした生であれば、大地を支配・所有する資本と国家の地政学へと吸い込まれてしまうだろう。問題は、国土にならない土、所有地にならない地をどう育み、どうそれとともに生きるかだ。「地を離れて吾等如何にか活きん？」（アナキストだった石川三四郎の言葉、一九二〇年）。

地下通路へと続く階段の様子（資料：筆者撮影）

（きたがわ しんや・三重大学人文学部准教授）

本の街・神保町で 韓国の本屋を開きました。

金承福
KIM Seungbok

近頃日本では韓国語を話せる人が増えてきました。また韓国語で本を読む人も少しずつ増えています。私が神保町に開いた韓国の本を扱う書店「チェッコリ」を訪れてくれるお客様も十年前に比べてずっと多くなり、年齢層も幅広くなりました。

思い返せば、韓国の本屋を開こうと決意したとき、周囲の人たちは口を揃えて「本より面白いものなんて山ほどあるのに、本屋なんてやめたほうがいい」と私を止めました。確かに韓流ドラマや映画、K-POPは世界中で人気を集め、その魅力は私自身もよく知っています。それに比べて本屋という場所はまだあまりにも地味で、目立たず、しかも商売として難しいと思われるで当然でした。それでも私は、本を通して人と出会い、言葉を通して心が動く瞬間を信じてみたかったのです。

私が大学生の頃はまだ日本文化が全面的に解禁される前でしたが、それでもサザンオールスターズ、

松田聖子、今井美樹、小泉今日子など日本の流行歌を友達と一緒に口ずさんでいました。そしてファッション誌『non-no』や『CanCam』を眺めては、髪型やファッションを真似してみる。隣の国なのに政治的にはとても遠い存在だった日本が、歌や雑誌を通じてぐっと近く感じられる瞬間が、私たちの日常の中に確かにありました。若者だけでなく親世代でも「日本風」が流行していった。当時マッシュルームだったので、リビングやキッチン、バスルームをどのように飾るか、日本のインテリア雑誌を参考にする人たちが増えていました。

同じ頃、私は日本の小説にも惹かれていきました。きっかけは大学の先輩が吉本ばななの『キッチン』を毎日ノートにページずつ翻訳し、学校に持ってきてくれたことです。孤独を抱え互いを癒し合う登場人物たち。なかでも、台所という空

間が救いの場だという主人公・桜井みかげの語りや、身寄りがなくなつたみかげに手を差し伸べる田辺雄一の母がかつては父親だったという設定——妻が亡くなったことで女性になってしまうなんて、どれほど愛していたのでしょうか——など、新鮮で衝撃的でした。当時の韓国文学にはなかった大胆さで、愛とは何か、家族とは何かを深く考えさせられました。

しかしある日、その先輩が学校に来なくなりました。彼が病氣だと聞いて最初に頭に浮かんだのは「小説の続きを読めない」という残念さでした。今思えばとても勝手ですが、それほど物語に心を奪われていたのです。

続きを読むために私は友人と「日本語を学んで、自分たちの力で原書を読もう」と日本語クラブを作りました。「あいうえお」から始め、「これはテーブルです」「テーブルの上に赤い鉛筆が三

本あります」といった文を練習し、辞書を引きながら『キッチン』の続きを訳すのです。幸い、ばななさんの文章はシンプルで分かりやすい。しかし深みがある。文芸創作科で学んでいた私たちは、ばななさんの文体にも魅了されました。

そんな私が大学卒業と同時に日本へ留学することを選んだのは、ごく自然な流れでした。本をもっと読みたい、日本の街を歩きたい、日本の人々と直接言葉を交わしたいという思いが、心を突き動かしたのです。そして留学を経て私は、韓国文学を紹介する出版社「クオン」を立ち上げ、ハン・ガン、キム・エラン、チョン・セランなど、さまざまな作家の作品を日本語で届けてきました。



(提供：出版社クオン)

出版社を立ち上げて十五年以上になりますが、翻訳出版した小説や詩集などが日本の読者に静かに、しかし確かに届き始めていることを嬉しく思っています。そして昨年、ついにハン・ガンがノーベル文学賞を受賞すると、多くの人が「チェッコリまでわざわざ足を運び「おめでとうございませう！」と声をかけてくれました。外国の作家個人が受賞したにもかかわらず、自分のことのように喜び、祝ってくれる読者がいる——その光景は、出版社を続けてきて本当に良かったと感じる瞬間でした。

クオンはただ本を翻訳して出版するだけでなく、作品の背景や韓国の社会、歴史、文化を伝えるトークイベントや読書会も行ってきました。本を「読む」だけでなく終わらせず、読者が作品を深く味わい、自分自身の言葉で語り合える場を作りたいという思いからです。そしてその拠点こそが、本の街・神保町にある本屋チェッコリでした。

チェッコリは今年十周年を迎えました。この間、韓国語を学ぶ人、韓国文学を愛する人、本を通して韓国をもっと知りたいと願う人たちが、毎日のように訪れてくれました。翻訳された本だけでなく原

書を手に取り、辞書を引きながら読む読者の姿を見ると、かつての自分を思い出し、胸が熱くなります。

本は決して派手ではないけれど、人の心を静かに揺らし、世界の見え方を変えてくれる力を持っています。あの日、『キッチン』を仲間と一緒に読んだ教室での記憶と、本で得た広い世界が、今も私を支えてくれています。

(キム スンボク・韓国コンテンツ専門出版社クオン代表、書店チェッコリ店主)



ひめやかな愛惜について

大胡 高輝 ŌGO Kōki

空が白みはじめる頃、たとえば自分がもっとも喪いたくない人を喪う夢、あるいはもっとも再会したいと願ってきた亡き人が自分の目の前で嘆きまどう夢、そうしたあまりに苦しい夢からさめて、呆然と起きあがれずにいると、やがて、明け方の心ぼそくしめった気配のなかでは思いが落ち着くはずもなく、涙があふれでてきてぽとぽとと枕がぬれてゆく、そのような、人々の心のなかに流れるほの暗い、とはいえどことなくやさしい香気をまとっているようでもある時間、おそらく人間の生死を司る基層に通じているはずであるそうしたなつかしい時間に根ざして何事かについて語り、あるいはうたう言葉は、いまの世にあって、しかし忘れ去られているように思われる。

そのなつかしい時間から引き離され、政治的・経済的・思想的等々の諸価値を未来に生み出すよう強いられて、人々の生命がしだいに弱まっていっているように見受けられるいま、何より切望されているのは、生命をやさしくあたためること、あのほの暗くやさしい時間から深い愛惜の思いを汲みあげ、その思いをみずからの語る言葉、うたう言葉にこめて生命をいたわることなのではないか。そしてまた、人々がそのなかに籠り隠れて生命を養うための言葉の世界を生みだすことが、さまざまな次元の自他、あるいは内外それぞれの人々をともにまもることを可能にするのではないか。

陸奥はいつくはあれど塩釜の

浦漕ぐ舟の綱手かなしも

(『古今和歌集』・東歌)

製塩地であった塩釜の浦に浮かぶ舟が綱でしづかに牽かれてゆく光景に、愛しみのまなざしに向けられる。そのつやめいたまなざしに満ちるこまやかな愛しみの思いは、どこか、あのなつかしい時間のおもかげをうつしつづけながら、かつてこの歌が「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」(同仮名序)の勅撰集の一首として世や人のありようの一端を枠どっていた時代を超えて、ふたたび人々の生命をあたためる時を、つつましくやかに待っているように思われる。

いま、なにほどかの自己否定をともなうある種の真摯さや厳肅さを、自分は信じることができず、むしろあの東歌に見られたようなひめやかな愛惜が、そうした否定をも悠々と覆い和めて、人々の生命を十全に回復させる力となる可能性を、夢想している。人々の、素朴な幸福を願う心の裏にある孤絶した呻きが痛ましくあらわになる、ぎりぎりの時代が来たのだということ、を見失わずにいたい。

生活よ

日に新しい果実のやうに

喜びの含まれてゆくやうに

私のまはりを日にめぐんでくれ

私の暗さをみな抹殺してくれ

(室生犀星「生活の喜び」)

「土崩瓦解」する世界と、 「完全なる立脚地」

繁田 真爾 SHIGETA Shinji

大学の授業を終えて、いつものように学生のリアクションペーパーを読んでいるときだった。おや、と思った。明日 2025 年 7 月 5 日、日本で大災害が起こるといわれているから心配です、とある。何のことだろう。しかも二人や三人ではない。複数の学生が同様のことを書いている。どうやら SNS など、日本で大災害が起こるといふ噂が広まっているらしいことを、このとき私は初めて知った。

私の少年時代にもノストラダムスの大予言などの終末思想があったから、このような現象が起こっていること自体、何ら不思議はなかった。けれども、こうした予言や終末論がまことしやかに語られ、人びとの不安をかきたてることが今なお繰り返されている事実には強い印象を受けながら、私はふと、「土崩瓦解」という言葉を思い起こした。

「土崩瓦解」とは、18 世紀以降、近代への転換期にあった日本社会の史料中に散見される言葉である。文字通り、土が崩れ、瓦が砕けるという意味。物事が根底から崩れて、もはや手のつけようなくなることのたとえだ。当時、欧米列強が武力を背景に日本列島を脅かすようになり、国内では百姓一揆や飢饉などが相次ぎ、人心は大きく動揺していた。つまり、内外の危機が相乗的に高まった結果、強い不安と恐怖が集散的に形成されて、「土崩瓦解」という終末イメージが広く醸成されたのである。

そして開国を選択し、文明化の道を歩み始めていた 20 世紀最初の年のこと。真宗大谷派の僧侶で、哲学者でもあった清沢満之は、「吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず」と世に訴えた。論説「精神主義」の冒頭に掲げられた、有名な一節である。もし立脚地がなければ、

まるで雲上で技芸を演じるように、転覆を免れることはできないだろう、とも清沢はいう。では私たちは、どのようにして「処世の完全なる立脚地」を獲得することができるのだろうか。「絶対無限者」に依拠することがなければ、それは不可能だというのが、清沢の確信であった。

日本の思想史を大観すると、中世まで人は神仏や天道に生の規範や原理を求めたが、近世以降になると、現世での成功や幸福など、此岸的な価値の方が次第に優位になっていく。こうして、それまで生のよりどころであった神仏などは、人びとの生き方から切り離されていった。しかしそのことによる代償は大きく、近代人は、市場原理や競争主義が亢進する社会のなかで生き抜くことを求められるようになる。こうして自明ではなくなった自身の生の意味や目的を、近代人は常に探し求め、問い続けざるを得なくなった。「絶対無限者」に依拠することがなければ「処世の完全なる立脚地」を獲得することはできないという清沢の「精神主義」は、そのような近代に固有の困難を鋭く眼差し、それを乗り越えようとした、おそらく最初の試みのひとつであったといえるだろう。

SNS の予言のように、世界は簡単には滅びないかもしれない。また地球規模の気候変動を憂慮しながらも、「土崩瓦解」のような破局はすぐには訪れないかもしれない。しかし、そのような不安や怖れが現実味をもって語られるほど、社会の危機意識は深まっていると見るべきだろう。いよいよ切実さを増す「〈よりどころ〉はどこにあるのか」という問いは、「よりどころが無ければ人は生きていけない」というそもそもの現実を、私たちにあらためて教えてくれているのかもしれない。

● 今号の執筆者紹介 ● 特集〈よりどころ〉はどこにあるのか

【特集】

田中瑛 (たなか あきら) —— メディア論

番組『ハートネットTV』、『クイア・アイ』などを分析し、ジェンダー、マイノリティなどを論じている。著書に『「声なき声」のジャーナリズム——マイノリティの意見をいかに掬い上げるか』（慶應義塾大学出版会、二〇二四年）。

辻浩平 (つじ こうへい) —— 国際報道

NHK報道局記者。エルサレム、ワシントン、ウラジオストク支局で特派員。紛争や政治的分断の現場取材・報道。著書に、なぜ多くの人がトランプ氏を支持するのかを解き明かした『トランプ再熱狂の正体』（新潮社、二〇二四年）。

栖来ひかり (すみき ひかり) —— 日台歴史・文化論

在住歴約二十年の台湾で現代の世相や日台関係取材。負の歴史と記憶に向き合う「移行期正義」を論じる。著書に『日台万華鏡——台湾と日本のあいだで考えた』（書肆侃侃房、二〇二三年）ほか。訳書に柯宗明著『陳澄波を探して——消された台湾画家の謎』（岩波書店、二〇二四年）。

柳澤田実 (やなぎざわ たみ) —— 宗教学・哲学

宗教などの文化的背景とマインドセットとの関係を中心に研究している。訳書にターニャ・M・ラーマン著『リアル・メイキング いかにして「神」は現実となるのか』（二〇二四年、慶應義塾大学出版会）ほか。

河野有理 (こうの ゆうり) —— 日本政治思想史

従来の方法論を問い返し、新たな政治思想史のあり方を構想。その議論は政治学、社会学、歴史学など幅広い分野に影響を与えている。今号では戦後政治思想の中の親鸞像に迫った。著書に『偽史の政治学——新日本政治思想史』（白水社、二〇一六年）ほか。

【Essays】

マーサ・ナカムラ —— 現代詩

現実と異界・他界とを浸透させあう感性で知られる今日を代表する詩人の一人。エッセイなど他分野でも幅広く活躍。第一詩集『狸の匣』（思潮社、二〇一七年）で第二十三回中原中也賞、第二詩集『雨をよぶ灯台』（思潮社、二〇二〇年）で第二十八回萩原朔太郎賞を受賞。

北川真也 (きたがわ しんや) —— 地理学

政治地理学・批判地理学の立場から、近年の地政学ブームに一石を投じつつ、生きた存在としての地球に触れるための新たな地理学を構想。著書に『アンチ・ジオポリティクス——資本と国家に抗う移動の地理学』（青土社、二〇二四年）ほか。

金承福 (キム スンボク) —— 出版社・書店経営

一九九一年から日本在住。韓国コンテンツ専門出版社クオン、トークイベントも開催する書店チエッコリを開業・経営。昨年ノーベル文学賞を受賞した作家ハン・ガンを、『菜食主義者』『少年が来る』（クオン、二〇二一年、二〇二六年）などでいち早く日本に紹介。

● 表紙の作家 ● 浅野竹二 (あさの たけじ 1900-1998年)

京都出身の版画家。日本画から木版画に転じ、自画・自刻・自摺の創作版画の手法で全国の名所を描いた風景画で人気を博す。繊細で軽妙な画風から事物の誇張や省略表現を進め、「自由版画」を確立。独特の哲学と健康なヒューマニズムが交差する独自の世界をつくりあげた。

● 表紙の作品 ● 「青頭巾」

1991年作、自由版画。
大阪府 20 世紀美術コレクション

奇妙な青い頭巾をかぶった、どこかつかみどころのない人物のような造形。その目鼻らしき白い線も、両手とおぼしき黒い線も、「もじゃもじゃ」だ、と浅野竹二作品の収集・展示に長年携わってこられた志賀秀孝さん（元府中市美術館主任学芸員）は言う。顔の「もじゃもじゃ」は混迷する人の表情にも見える。青と赤の部分の「もじゃもじゃ」は、何かへ向かって手を伸ばしたいが、できずにいるかのようだと、志賀さんは読み解く。その姿に、みなさんは何を感じるだろうか。



雑誌『aṅjali』の願う

私たちは今、さまざまな困難や苦悩の中にあり、人間とはなにかという問いさえ見失う危機に直面している。私たちは、この現代の課題を丁寧に受けとめて生きるための思想の指標、信念の立脚地を必要としている。

親鸞仏教センターは、複雑な世界の現実を見つめ、社会・文化・思想などの問題が問われる現場や研究の最前線において、親鸞の仏教思想を現代的な文脈でより幅広い人々と共有するという、近代の真宗大谷派の課題を引き継ぐ研究・交流施設であり、雑誌『aṅjali（アーンジャリ）』は、その精神を誌面において具現化し、ともに語り合う場をひらくことをめざす当センターの定期刊行物である。

本誌は、時代・社会と自己の苦悩を如來の大悲によって超えていこうとした親鸞の思想の核心をふまえ、各分野の最先端で活躍しておられる有識者の方々に論考・エッセイの執筆を依頼している。

第41号のリニューアル以来、現代において取り組むべき課題を多角的に照射するために特集を組み、またその他の幅広い問題に触れる機会を「Essays」欄で提供することにした。また特集テーマとその趣旨文、所長の連載、職員のエッセイ「交差点」によって、当センターの問題意識をより鮮明に打ち出すことをめざしている。

このささやかな雑誌が、現代の諸問題への向き合い方を学ぶことに意欲的な人々に訴えかけ、またそれらを初めて知る人々にとつての気づきとなり、そのことによって読者・執筆者・当センターの職員がともに学び、歩んでいくことができるような交流の場となることを願う。

そのような課題に真摯に向き合う人々への思いを込めて、本誌は、『aṅjali』——サンスクリット語で「合掌」——と名づけられている。

（二〇二五年十二月 親鸞仏教センター）

『aṅjali』 第45号 2025年12月1日発行

発行者 本多 弘之（親鸞仏教センター所長）
編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
<https://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

制作 さいはて社
デザイン・イラスト 早川 宏美

お知らせ

- 『aṅjali』第45号をお届けします。
- 本誌『aṅjali』の定期購読・バックナンバーのお求め・お問い合わせは、電話・FAXのほか、当センターホームページの〈専用フォーム〉からも受け付けております。

〈親鸞仏教センターウェブサイト aṅjali ページ〉 <https://shinran-bc.higashihonganji.or.jp/anjali/> ▶

（バックナンバー一覧の下にお申し込みフォームのご案内がございます）



